

Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

社会主義 体制史研究

No.23 (Oct. 2021)

東独秘密警察をめぐる女優グレルマンと元夫・俳優ミュエの争い

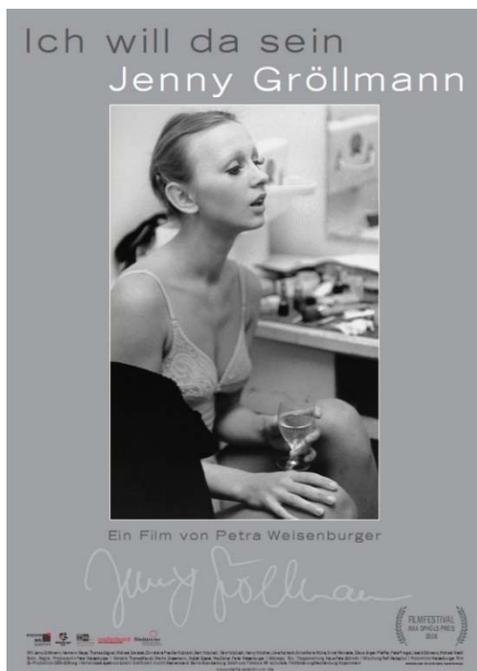
ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

青木國彦(東北大学名誉教授)

Der Streit Jenny Gröllmanns mit Ex-Ehemann Ulrich Mühe
über die Stasi-Verstrickungen

Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)



社会主義体制史研究会

The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

下記の旧 URL から自動切替(リダイレクト)

旧 URL: <http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

(違いは www の次に「2」の有無のみ)

publisher: 社会主義体制史研究会

(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to aoki_econ3tohoku.4.5 (3=@ 4=ac 5=jp)

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。

旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

表紙写真

左: 女優イェンニー・グレルマンのドキュメンタリー映画のポスター

この映画「私はそこにいたい:グレルマン」(Ich will da sein: Jenny Gröllmann)は、ヴァイゼンバーガー(Petra Weisenburger)監督の女優グレルマン記録映画であり、もし彼女が東独の枠内に留められなければ「世界的スターたり得ただろうに」という「認識」(本文のBuß 18.06.2008)の下に作られた。映画の内容は本文4節参照。

(出所) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:IchWillDaSein-JennyGroellmann_Platat.jpg (CC BY-SA 2.0)

右: 「幽霊」(1983年)で息子役のウルリッヒ・ミュエ(中央)

イプセン原作の「幽霊」(ドイツ劇場、T.ラングホフ演出、1983年11月18日初演)に出演したミュエ。T.ラングホフ(Thomas Langhoff)は本文脚注21参照。

(出所) File: Bundesarchiv Bild 183-1983-1118-005, Berlin, "Gespenster".jpg,

in: <https://commons.wikimedia.org/wiki/> (CC-BY-SA 3.0)

東独秘密警察密告をめぐる俳優ミーエと元妻・女優グレルマンの争い

ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

青木國彦**

Der Streit Jenny Gröllmanns mit dem Ex-Mann Ulrich Mühe um die Stasi-Vorwürfe Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

Kunihiko AOKI**

目次

1. はじめに 1
2. 二人の略歴 1
3. 裁判経過 2
4. グレルマン 3
5. シュタジ少佐メンゲの引退後の告白 4
6. シュタジのジャンヌ文書とグレルマンの宣誓供述書 6
 - 6.1 シュピーゲル誌(2006年4月29日)から 6
(補注)シュタジ密告者カテゴリーIMSとは 8
 - 6.2 ベルリン新聞(2006年5月3日)から 8
 - 6.3 ベルリン新聞(2006年6月21日)から 9
7. グレルマンの長女ジャンヌの父 T.ゴグエルの失態 10
8. インタビュー:互いの怒りと苦悩 11
 - 8.1 グレルマンに(シュテルン誌 2006年7月30日) 11
 - 8.2 ミューエに(ビルト紙 2006年6月5日) 12
 - 8.3 ミューエほか(シュピーゲル誌 2007年3月4日) 12
9. 最後に 15
- 略語・引用文献 15

1. はじめに¹

俳優ミーエ(Ulrich Mühe)は大ヒットシオスカーを獲得したドイツ映画「他人の生活」(2006年3月初演、邦題「善き人のためのソナタ」、以下この映画と呼ぶ)のシュタジ大尉ヴァイスラーを演じた。

彼は西側にたびたび出張する「旅行幹部」(Reisekader)の家庭の育ちだが、学生時代には体制批判的の文学を読み、ピアマン追放反対署名を集めようともした。その後東ベルリンのドイツ劇場で活躍するとともに西独映画にも出演した(彼の興味深い東独体制体験は青木 2021:5 節参照)。

東独の人気女優であったグレルマン(Jenny Gröllmann)は、元ナチ抵抗闘士を両親とする思想的文化的エリート家族の体制肯定的環境の中で育ち、すでに子役としても人気を集め、社会的問題意識を持つことがなかったと言われる。

その二人が 1982 年にテレビドラマの撮影で知り合い²、1984年に結婚、1990年に離婚した。離婚から16年後出版の本の中でミーエは、元妻グレルマンがシュタジ(東独秘密警察)のIM(非公式協力者)だったと非難した。

この件はすでに2001年に雑誌報道があったが、大きな話題にならなかった。しかし BStU(シュタジ文書保管庁)は当該 IM 文書を、むしろ通例どおり一定基準に基づく黒塗り付きで、閲覧可能にし、ジャーナリストたちも閲覧した。

ところがこの映画の脚本の出版(2006年)の中でミーエがグレルマンを IM だったと非難し、映画のヒットもあってことは大きな話題に発展した。当時すでに重症のがんであったにもかかわらず、彼女は事実無根として、同書の配本禁止を求める裁判を起こし、法廷もジャーナリズムも沸騰した。彼女は勝訴したが、判決直後に死去した。

出版社は年内に判決を承認し、ミーエもついに翌年初めに届いた。彼もがんのため判決1年後死去した。

ミーエは、グレルマンがシュタジの IM であったと思ひ込み、まるで自分がこの映画の中の劇作家ドライマン、クリスタ

がグレルマンのようだと怒り、裁判を闘った。それを、グレルマンとの離婚原因となったその後の妻ロータル(Susanne Lothar)が叱咤激励した。

グレルマンは、刑事警察官という触れ込みの相手に協力したつもりが、実はシュタジ(東独秘密警察)だったこと、文書には明らかな虚偽があることに憤然としつつ、非難に対抗した。

この事件のもとになった文書の作成者はシュタジ少佐メンゲ(Helmut Menge)であり、シュタジ内部でも処分に値するずさんな作成であった。加えてその文書に基づいてグレルマンをクロと判定したバートラー時代の BStU やベルリン自由大学の研究グループの「鑑定」力も問われる。

以下ではこの事件の経過およびジャーナリズムの対応を紹介する。そこから体制崩壊後も続く文化人の独裁体制とその遺物をめぐる争いと苦悩の一端を知ることができる。

2. 二人の略歴

二人の事件以前の略歴は次のとおりである(但し以下の諸節にも経歴の追加説明がある)：

ミーエ(1953.7.20-2007.7.22)はライプチヒ県グリマ(Grimma)に生まれ、ライプチヒ演劇大学(1975-79年)卒、1975-82年カールマルクスシュタット(旧・現ケムニッツ)の劇場所属、1982年東ベルリンの民衆劇場(Volksbühne)に客演、1983年から東ベルリンのドイツ劇場や小劇場に出演。

1984-90年グレルマンと二度目の結婚[後述のアンナが生まれた]。ヴァイゲル・メダル(Helene Weigel-Medaille)など受賞。1989年11月4日の東ベルリン・アレキサンダー広場での大集会・デモの発起人[・演説者]の1人となる。

1990年以後は主にウィーンのブルク劇場劇団員。各種受賞。2006年8月[正しくは7月]元妻グレルマンをIMと呼ぶことが裁判所から禁止された(Müller-Enbergs 2010:906)。

ミーエの最初の妻は文芸員・演出家・劇場総監督ハーン

* in: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

** 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University
mail to: aoki_econ3tohoku.4.5 (3=@, 4=ac, 5=jp)

¹ 以下の[]内と...による省略は青木、...は原文の省略。

² <https://www.defa-stiftung.de/defa/biografien/kuenstlerin/jenny-groellmann/>

(Annegret Hahn)で2人の息子を設け(うち1人は8.3節にあるアンドレアス)、3番目の妻ロータルとは1997年結婚、2人の子ができた(Osang 2007; de.wikipedia)。

グレルマン(1947.2.5-2007.8.9)は、西独ハンブルクに生まれたが、[共産主義者の]両親(父は舞台装置家、母は演劇写真家)とともに1949年東独に移住。

すでに14才の時[ちょうど壁建設の年]にドレスデン劇場におけるブレイト劇「シモーネ・マシャールの幻覚」(Die Gesichte der Simone Machard)³の主演としてデビュー。1966-92年東ベルリンのマキシム・ゴーリキー劇場所属。映画・テレビドラマにも多数出演。

1969年長女ジャンヌ(Jeanne)出産[彼女はグレルマン姓で、メイクアップアーティストとなり(脚注2)、現在も活躍中⁴]、父親は[後述の]T.ゴグエル(Thomas Goguel)である。

彼女は1973年映画監督カン(Michael Kann)と結婚[1982年まで]、1984-90年ミュエと結婚、1985年次女アンナ(Anna)[現在女優]を出産。

2004年映画美術監督プファイファー(Claus Jürgen Pfeiffer)と結婚。[彼女が「1999年以来」がんを患っていることを彼も承知の上での結婚(Sylvester 03.05.2006)。]

[統一ドイツでも]1992~2005年自由業女優として「リープリンク・クロイツベルク」[後述]など多くのテレビドラマに出演。がん罹患[1999年乳がんと診断された⁵]。

「2001年と2006年に」[2004年も]シュタジIMに従事と非難されたが、その非難は「2008年4月18日の判決により禁止された」[この判決はフォーカス誌への判決であり、すでに2006年7月に最初のグレルマン勝訴判決がある(8.3節)]。(特記以外はMüller-Enbergs 2010: 432f.)。

3. 裁判経過

裁判沙汰の発端となった本はDonnersmarck(2006)である。中身の大部分はこの映画の脚本だが、ドナースマークらのミュエへのインタビューも収録され、その中でミュエがグレルマンをIMだったと非難した。

IMとはシュタジの「非公式協力者」(Inoffizieller Mitarbeiter)の略語で、シュタジに協力する密告者であり、時に暗殺を含む陰謀工作も行なった。協力の動機は本人の信念からシュタジによる脅しまで様々である。

グレルマンの非難不当との訴えに基づき、2006年4月13日にベルリン州裁判所(Landgericht Berlin)がこの本の該当部分の「今後の配本」禁止の仮処分を出した(Deggerich 13.04.2006)。仮処分には、グレルマンが4月10日に署名した「宣誓供述書」が添付され、そこにはすべてがシュタジの捏造だとあった(Deggerich 2006)。

その結果、この本のグレルマンをIMと主張する部分が、印刷済みの未配本は黒塗り、その後の版では削除となった。

2006年7月4日には同裁判所がミュエ敗訴の判決を

出した(Spiegel 04.07.2006)。それはがん闘病中のグレルマンの死(8月9日)の直前であった。ミュエも1年後の7月22日やはりがんのため死去した。

このインタビューを掲載した出版社ズールカムプ(Suhrkamp)の法的代理人が2006年12月19日にベルリン州裁判所に対して、[同書内の]ミュエのこの発言を今後配本しないとの承認声明をし、同裁判所が2007年1月18日に「認諾判決」(Anerkenntnisurteil)を出し、判決が確定した⁶。ミュエも判決承認を2007年初めに声明した(8.3節)。

だから、私の手元にあるDonnersmarck(2007:200)には、ミュエへの「インタビューは2005年10月22日に行なわれた。ここにある版は[2006年版から]改訂され、短縮されている」という注記がある。

注記に「短縮」の量は書かれていない。実は非難発言は非常に長く、「4印刷ページ近くを占める」(Sylvester 03.05.2006)。2007版に残った彼のインタビュー記事は多くの話題にもかかわらず18.5印刷ページにすぎないから、IM非難が占めた比重は大きかった。未配本の2006年版の黒塗りは大変だから、本当に実施したのだろうか。また私が購入した別のドイツの本に氏名の黒塗りがあったが、透けて見えた。

ズールカムプと異なり、フォーカス(Focus)誌[シュピーゲル誌の対抗ニュース誌]は、ベルリン高等裁判所(Berliner Kammergericht)に控訴して闘い続けた。原告グレルマンは判決直後に死去したから、控訴審では三番目の夫プファイファーが原告を継承した。

実は同誌は2006年4月に独自のミュエ・インタビューを「“なんたる精神錯乱”という見出しのもとに」掲載し、主な裁判対象でもあった(Müller 08.02.2008)。しかし州裁判所での裁判報道の殆どがドナースマークらによるインタビューのみを取り上げた。

控訴審では同裁判所の要請によって「バートラー片」(=BStU)⁷が6ページからなる「鑑定」を提出した。そこには、州裁判所の場合のベルリン自由大学研究グループのそれと同様に、グレルマンが暗号名「コオロギ」ないし「ジャンヌ」としてIM協力を「口頭で誓約し」、「意図的にかつ故意に」情報、例えば劇場の客演旅行の経過や同僚間のレズビアン関係、彼女の両親のピアマンの家族との友情、結婚前のミュエについて情報提供し、1979年から1989年終了まで24回の指導将校との会合があった、但し本人手書きの証拠はないと記された。また最初の会合(1979年)にはシュタジ将校2人のほか当時のグレルマンの夫でIM「フランツ」(Franz)でもあったカンも参加したとある。

他方でグレルマン側は、指導将校メンゲがグレルマンのIMへの「徴募の試みの失敗を上司たちに対して覆い隠そうとし」、諸情報を偽造したと主張した。シュテルン誌も「IM文書の広範な部分が捏造された」という証拠を持っていると主張して支援した(Müller 08.02.2008)。メンゲの標的であったプラガル(5節以下に度々登場)は当時シュテルン誌の

「ニシアチブ」で活動した。彼女は控訴審の最中の2007年に別の大失策も犯した。BStU マグデブルク支所が[東独国境における]「射撃命令」の証拠となる文書を発見したと言い出し、バートラーがこれを「最高に重要な発見」と言明し、8月11日にドイツ各紙が一斉に報じた。しかし翌日にはそれが14年も前にBStU本部内で知られた文書であるのみならず、10年前には公刊されていたことが分かり、バートラーがBStU本部内の確認を怠り、BStU存続確保のために功を焦って誤発表したと強く批判され、かえってBStU不信を強めた(詳細別稿予定)。

³ 岩淵達治訳『ブレイト戯曲全集』(未来社1999)第6巻所収。

⁴ <https://kostuemberlin.de/about>

⁵ https://www.steffi-line.de/archiv_text/nost_buehne/06g_groellmann.htm

⁶ https://de.wikipedia.org/wiki/Jenny_Gröllmannの注11によると、判決整理番号(Aktenzeichen)は「27 O 757/06」である。

⁷ BStUの当時の通称。当時の長官がバートラー(Marianne Birthler)である。彼女は、「我々の見解ではグレルマンのケースの文書状況は争いの余地が全くない」とヴェルト紙に語った(Müller 08.02.2008)。彼女は元東独反体制活動家で、主に「平和と人権イ

東ベルリン特派員であった。

結局、同高等裁判所第10民事部はパートラー一斥の「鑑定」を採用せず、2008年4月18日にフォーカス誌の控訴を却下した(整理番号10 U 211/06)。判事ノイハウス(Stefan Neuhaus)は前日の「公開」の「口頭審理」においてすでにシュタジ文書の問題点(下記)を表明していた。

それによると、[IM 協力という事実の認定には]シュタジの中のグレルマン文書の「存在だけでは不十分」であり、その文書にはグレルマンのIM 誓約書がないこと、「いわゆる指導将校との会合と女優の舞台出演の間の不整合が複数存在する」こと[4 節参照]などから、彼女の「シュタジとの意識的な協力への疑念が生じた」ので、グレルマンへのシュタジ協力非難は「容認されない」。

同判決によると、同誌のインタビュー質問自体がグレルマンの「疑惑についての表現の許される限度を超え」、「疑惑報道は可能だが、容疑者に有利な諸論証も挙げられねばならなかった」。さらにインタビュー内容は「容疑についての容認されうる発言ではない」のみならず、シュタジに「協力したという事実の主張が含まれている」にもかかわらず「主張される事実のための十分な証拠をこの雑誌は提示しなかった」。

上記鑑定にある「最初の会合」(1979年)についても「この雑誌は十分な証拠を提示しなかった」と判断された。

「“容疑事実”は存在する」が「それを事実として主張することは許されない」と判決は結論した。(以上の判決内容はTSP 18.04.2008; Waehlich 18.04.2008; Welt 18.04.2008; Müller 08.02.2008による)。

この判決の主旨は上記州裁判所判決と同様であった。

フォーカス誌は上告不許可について、同誌は「ミュエとのインタビューを公表しただけ」であり、「裁判所がそのように報道の自由を制限することを我々は納得できない」として連邦最高裁(BGH)に抗告した(Waehlich 18.04.2008)が、認められなかった(2009年12月15日決定)⁸。

こうしてグレルマンへのIM 非難の差し止めは彼女の死後3年半近く経ってようやく完了した。その間にも、以下のように、彼女への擁護と疑念の論争は続いた。

4. グレルマン

グレルマンについては Sylvester(03.05.2006)が、ミュエによるグレルマンへのIM 非難との関連でより詳しく紹介した。その副題「女優グレルマンが元夫ミュエによるシュタジ非難に反論」とあるように、グレルマン寄りの記述である。要旨は以下のようである(記述順序は一部変更、一部補足)：

グレルマンは、舞台装置家の父、写真家の母とともに1949年に西独ハンブルクから東独シュヴェリーンに、1955年に東独ドレスデンに移住した。父は「共産主義者および[ナチ]抵抗戦士として刑務所と強制収容所に送られ、独房に鎖につながれ、拷問による尋問を受けた」[従って東独では優遇された]。両親は同様の立場の[両親を持つ]ピアマン

⁸ https://de.wikipedia.org/wiki/Jenny_Gröllmann の注記 12 に判決整理番号があるが、同裁判所の判決文サイトには掲載されていない。

⁹ 「湿原兵士の歌」は、ベルガーモーア強制収容所(KZ Börgermoor)でW.ラングホフ(Wolfgang Langhoff)らが作詞し、R.ゴグエル(Rudi Goguel)が作曲した。Hielscher(27.08.2018)に詳しい(写真も多数)。同収容所はナチ最初の強制収容所の1つ。W.ラングホフは古参のドイツ共産党員で、戦後東独で俳優・演出家・総監

らとも親しかった。母はのちに東独誌 Magazin 写真部長になった。Pergande(29.04.2006)によれば、父はスペイン内戦にも参戦した。

グレルマンの「長女ジャンヌ(Jeanne)の祖父」はナチ強制収容所における有名な「湿原兵士の歌」(Das Lied von den Moorsoldaten)の作曲者であった⁹。

[この歌の作曲者 R.ゴグエル(Rudi Goguel)の息子 T.ゴグエルが長女ジャンヌの父である。T.ゴグエルはシュタジのIM であった(7 節参照)。後述のように、長女の名前ジャンヌがグレルマンのIM としての暗号名とされる。]

1985年に初演されたドイツの詩人ヘルダーリン(Friedrich Hölderlin)[1770-1843年]の半生を描いた東独映画「人生の半分」(Hälfte des Lebens)[YouTubeに複数ある]では、主人公ヘルダーリンをミュエが、その家庭教師先の銀行家夫人で、ヘルダーリンと愛し合う女性をグレルマンが熱演した[西独でも上映]。その年グレルマンはミュエとの子である次女アンナを出産したが、二人は1990年離婚した。

グレルマンは東独では「非常に人気があった」が、統一ドイツでは「有名ではなかった」。しかし「リープリング・クロイツベルク」(Liebling Kreuzberg)という人気の連続テレビドラマにおいて、クルーク(Manfred Krug)¹⁰が演じる主人公弁護士リープリングのパートナー弁護士役として出演し、それによってグレルマンは[統一ドイツの女優として]「定着した」。

この出演は作家プレントドルフ(Ulrich Plenzdorf)¹¹の推薦による。[彼も東独出身で、このドラマの1994年からの第4シーズンの脚本を書き、そこにグレルマンを出演させた。]

グレルマンはその出演後「1999年までに病気[がん]を発症した」[1999年に判明]が、化学療法によりその後も健康を維持し、カツラを付けて仕事を続けた。

その最中の2001年11月18日、ビルト紙日曜版(Bild am Sonntag)が「イェンニー・グレルマン。シュタジ文書が出現！」と題して、IM「ジャンヌ」(Jeanne)が「1979年から1989年までグレルマンの暗号名だったと言われる」と報じた。[ベルリンの]週刊誌 Super-Illu(スーパー・イラスト)も続いた。しかしこれらは「大きな反響がないままであった」。

ミュエ自身も、この時は Super-Illu 誌によってジャンヌ文書を知っても「すべてのインタビューの申し出を厳しく拒否した」[つまりIM 非難を発信しなかった。]

グレルマンは2002年初めの定期健診でがん再発がみつき化学療法を再開し、仕事中断となった[とあるが、2005年までテレビドラマに出演した(Müller-Enbergs 2010:463)]。

「57才」の時[2004年]に「ある映画美術監督」[プファイアー(同前)]と、[カン、ミュエに次ぐ]「3回目の結婚」をした。ミュエのもとにいた次女アンナがグレルマンと同居した。

[2004年にミュエが文学雑誌「ホーレン」への寄稿の中で「かなりの間私の妻はシュタジに協力していた。それがDDR [=東独]であった」と記した(Müller 14.01.2008)。これも大きな反響はなかったようである。ホーレン(die horen)

督として活躍し1966年死去(Müller-Enbergs 2010:758)。

¹⁰ 東独の俳優・歌手で、ピアマン追放抗議に参加、1977年出国し、西独で活躍(Müller-Enbergs 2010:758)。出国の際に当時の有力政治局員でリベラル派と目されたランベルツ(Werner Lamberz、アジプロ担当)らとの会話の録音を持ち出し、当時の日記とともにのちに出版した。それがKrug(1996)である。

¹¹ アンソロジー自主出版事件の主役の1人で、詳しくは青木(2020a)参照。

はギリシャ神話の季節と秩序の3女神 Horen に由来する。]

「2005年10月22日」にミューエが、ドナースマークの「映画の脚本“他人の生活”のためのインタビューに応じた」。その中で「ミューエは彼の元妻がシュタジのために働いたと非難」した。それを収録した「本が〔2006年〕春に出版された」。この映画の「初演〔3月〕の直前」であった。〔Stöhr 23.06.2008によると初演の「1週間前」。〕

ミューエが主演したこの映画の中ではドライマンが知らないうちに同棲相手クリスタがIMになった。そこでミューエは、「彼の個人史をこの映画の物語が真実だという証拠のように利用した。彼はそれを良い機会だと考えたに違いない」。だから、2001年当時と異なり、今回彼はインタビューの中でグレルマン非難の声をあげた。

〔同様の主張をT.ゴグエルがした。ドナースマーク明らかに「良い機会」と考えただろうが、ミューエにもその気持ちがなかったとは言えない(7節)。〕

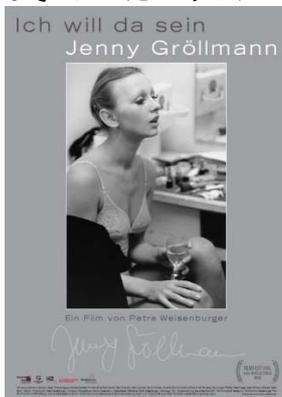
これを各メディアが報道し、非難が起こり、「古い写真」も掲載された。ターゲスシュピーゲル紙(以下 TSP)はシュタジの「当時の指導将校少佐メンゲ」との会見記事〔=5節で取り上げるSchreiber 29.04.2006〕を報じた。だから〔捏造が明らかになり〕「結論としてそれは無罪判決である」。

グレルマンはすぐ4月に、「私はいかなる時にも意図的に旧DDRの国家保安省と協力したことはない。特に私は非公式協力者として自分を義務付けたことはない」などと記した宣誓供述書を法廷に提出し、「出版社に対する仮処分を達成し」、〔既印刷分は〕黒塗り配本となったが、「店頭ではすでに未修正の本が販売されていた」。(以上特記しない限りSylvester(03.05.2006)から。)

グレルマンはがん再発判明後の2004年に「長年の友人」である女性監督ヴァイゼンブルガー(Petra Weisenburger)に「余命数ヵ月」だと話した。そこでヴァイゼンブルガーは映画人である友人・知人を集めて彼女を撮影することにした。

実際の「余命」は2年間に及び、彼女の埋葬のシーンまで撮影され、彼女の出演映画の抜粋や、「過去の仲間」との思い出、「シモーネ・マシヤール」のモデル Simone Signoretのバリの墓地訪問などの「エネルギーで楽しいグレルマン体験」も挿入された。

図1 映画「私はそこにいたい:グレルマン」のポスター



¹² この映画もシュピーゲル誌編集部内にIMを設定した(青木2020b:20)。

¹³ 私は国際文化会館の派遣で長期滞在した際にパノラマ社の手配で国营企業を何社か訪問した。私の短いシュタジ・ファイルにはその訪問手配のごく簡単な記述があった。シュタジへの報告が同社の義務だったのだろう。西ベルリンにも東独のスパイやIMがいたので、ドイチュラントハウス(チャーリー検問所近く、東独当局は帝国主

(出所) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:IchWillDaSein-JennyGroellmann_Platat.jpg (CC BY-SA 2.0)

出来上がった映画が「私はそこにいたい:イェンニー・グレルマン」(Ich will da sein: Jenny Gröllmann, 図1)である。

この映画は2008年6月に公開されたが、その際の上映館はドレスデンやライプチヒなど6都市に旧東ベルリン地区を加えた旧東独地域と、旧西独地域ではフランクフルトとベルリン(西)のみであった(以上Stöhr 23.06.2008)。

5. シュタジ少佐メンゲの引退後の告白

メンゲは、シュタジ本部で防諜を担当する第II局(Hauptabteilung II)の中の西側ジャーナリストを担当する第13部(HA II/13)の第2課課長として西独特派員の監視と工作に当たった。

第13部は国内だけではなく、「作戦地域〔主に西独・西ベルリン〕内と作戦地域向けの活動」も行ない、その際特に「出版機関編集部への入り込み」を目指した¹²。また東独の対外プレスサービス会社パノラマも監視した(表1)¹³。

表1 第II/13部の構成(1989年)

部長	大佐 D. Schaffer
部長代理	中佐 H.-D. Ternies、同 M. Spalteholz
第1課	少佐 R. Heise、NATO 諸国特派員(西独以外)
第2課	少佐メンゲ Helmut Menge、西独特派員
第3課	大尉 D. Töpelt、作戦グループ内活動
第4課	少佐 H. Damm、国際プレスセンター、パノラマ
第5課	少佐 G. Kessel、評価・情報

(注)課の欄は課長と担当分野。パノラマは東独の対外プレスサービス社。(出所)Labrenz-Weiß(1998:4,22)

第II局は1989年には21の部と参謀部、4グループから成る大組織で、1976年以来長年局長・中將クラツチュ(Günther Kratsch)が率いた(Labrenz-Weiß 1998:10,52)。

1989年の常勤職員は第II局1432人、ラインIIを構成する各県支部第II部合計934人、第II局所属IMは「少なくとも3000人」、同じく県支部第II部所属IMは「約4000人」、数は不明ながら郡支所にもIMがいた。1976年の数字だが、「西」在住IMは109人であった(Emgelmann 2016:134)。

引退し年金生活中的の元シュタジ少佐メンゲの告白をターゲスシュピーゲル紙(TSP)が報じて(Schreiber 29.04.2006)、各紙誌に衝撃を与えた¹⁴。

記事は、日付が示すように、ベルリン州裁判所の仮処分決定(2006年4月13日)後ではあるが、判決(2006年7月4日)(3節)の前に書かれた。だから法廷闘争最中の雰囲気を反映している。

記事の筆者シュライバーは「2007年までTSPのチーフレポーター」(Schreiber 2009:2)として編集陣にあった。3年後出版の著書Schreiber(2009:191ff.)はこの記事をそのま

義者・報復主義者の巣窟と見たが、FS(研究所)も所在や自由大学への出入りの記載があるかもしれないと思ったが、なかった。

¹⁴ 但しグレルマン自身ももっと早くメンゲに面会し、「彼が彼女の知らないうちにIMとして彼女を指導したことを知り、彼はそのことと文書捏造を謝罪した(Sylvester 03.05.2006)。面会日は、この記述が2002年のがん再発見よりも前にあるから、おそらくビルト紙日曜版など記事(4節)が2001年に出たあとまもなくだろう。

ま載せ(副題のみ追加¹⁵)、その後の経過には触れていない。

この記事の表題「そそのかし将校」(Der Verführungs-offizier)はメンゲへの揶揄である。この記事によれば:

メンゲ文書は合計 522 ページもあり、BStU はそのうち「約 150 ページ」をジャンヌ文書として〔報道・研究関係者に〕公開した。〔そこには報告のほか録音テープ(合計約 2 ダース)からの書き起こしも含まれた(Pergande 29.04.2006)。〕

その第 276 ページに、東ベルリンのパンコウ区マヤコフスキー 31 という「一等地」の「閣僚会議の供給施設」と偽装したシュタジの家“城館”(Kastell)での 1979 年 9 月 20 日の「シュタジにとっておそらく決定的な会合がメモされている」。

筆者は、メンゲ(この時 62 才)と〔記事執筆の直前にベルリン中央区の〕「ウンター・デン・リンデンのカフェ・アインシュタインで会う約束をし、〔自分の〕目印」として新聞 TSP を持参した。

問題は、BStU で見つかった「“ジャンヌ”という案件文書の束であり、〔その中の〕メンゲの非暗号文(Klartext)には映画やテレビでよく知られている女優グレルマンの名前がある」。メンゲ文書は「1989 年 11 月 17 日に終了」した。

〔終了は壁開放 8 日後である。非暗号文とあるのはグレルマンがジャンヌではなく本名で書かれたからだろう。メンゲが文書に封印したのは翌月 13 日である(6.1 節)。〕

メンゲは彼女に「ヘルムート・ホルム」(Helmut Holm)と名乗った。彼はホルムとしてゴリーキー劇場の彼女の舞台を見に来ることもあった。

〔シュタジ指導将校は IM 登録された者に本名と職位を明示する。少なくともこの段階では彼女が IM ではないからこそ、後述のように、メンゲは刑事警察官という作り話で彼女に接近し、かつ偽名を名乗った。その後いつグレルマンが IM に応じ、従ってまたメンゲが正体を明かしたかは、メンゲ文書の紹介文献に記載がない。文書自体にもそれが明らかではないから彼女が勝訴し、またメンゲも以下のように証言する。〕

この手法は 1976 年制定の OV 規定(作戦事案規定、AGM 198)の「2.6.2. 分解の形態、手段、方法」の中の「分解の実証された手段・方法」の 1 つとして挙げられている「信じるに足るか、または信じるに足りない理由付けによる役所または社会組織への召喚状」の応用だと言える。

「2.6.2.」項末尾には、「手段と方法は各作戦事案〔OV〕の具体的諸条件に応じて創造的かつ〔相手により〕差別的に適用され、拡充され、一層発展させられるべきである」とある(青木 2021b:9)。グレルマン接近は OV ではなく監視作戦(OPK)の手段であったが、作り話作戦は広く使われた。〕

彼は上級体育教師の資格を持ち、青少年スポーツ学校の近代五種トレーナー〔フェンシング 2 種、水泳、馬術、射撃〕であった。

シュタジとしての彼は、「人身売買人〔=東独からの逃亡援助をする西独人〕の撲滅」の功績で「報奨金」を得たことがあり、また「西側ジャーナリストに対する“信用失墜措置の導入”」を特技とし、「IM 活動に適した候補者を絶え間なく探す」ことで知られた。

メンゲ文書には「エリザベート、フランツィスカ、エヴァ・ベア、

ペーター・ヴァイス」といった暗号名による情報もある。メンゲは「ローマの泉」(Römerquelle)〔オーストリア産ミネラルウォーター〕を飲んでから、それらが誰かを「いまだに覚えている」と言う。

メンゲ文書にはグレルマンが「自ら彼女の娘の名前を取って暗号名“ジャンヌ”を選択した」とある。しかし今になってメンゲが言うには、彼女自身は「IM として登録された」ことを「知らなかった」。

グレルマン自身も、「きちんと推敲された説明と反論の中で彼女の弁護士ランガー(Hardy Langer)を通じて事態を断定的に否定し、「旧 DDR の国家保安省(MfS)と決して協力したことがなく、IM として協力したこともない」と表明した。

「彼女の証言が事実なら、メンゲは、彼の空想物語の中心人物に、よりによって売れっ子の女優を定めたことになる」。これは、「シュタジの妄想症(Paranoia)についての遅きに失した研究のための起爆剤」となる。

同文書の中にある彼が作成した手書きの「年表」では、彼女の暗号名は当初「グリレ(Grille)」(コオロギ)〔グレルマンをもじったのだろう〕であったが、メンゲは「誰がそれを思いついたか知らない」とつぶやく。

また彼女との会合日時など「彼の文書の多くの矛盾について」聞くと、「彼は予言的に“何らかのやり方でそれが行なわれた」と言明する」。

彼は〔1979 年に〕、グレルマンに「刑事警察」の「ヘルムート・ホルム」と自己紹介し、「ミュンヘンのホテル・エクセルシオールのレストランのある偽の(そして彼女を悩ます)手紙を持って」近づいた。「この“作り話”を彼は最後まで貫いた」¹⁶。当時グレルマンの夫であったカンハはメンゲの IM「フランツ」として協力した。

〔念の入ったことにメンゲ文書には、偽手紙という「作り話の信頼性を根拠づけるために”彼女に人民警察の部屋に来てもらう」と記された(Sylvester 03.05.2006)。〕

〔グレルマンは、夫が IM である上にメンゲの標的であるシュテルン特派員ブラガル(Peter Pragal)¹⁷夫妻〔6.1・6.2・8.1・8.3 節参照〕と親しいこと、シュタジにとって彼女の出自が確かなことから、メンゲが彼女を選んだのだろう。〕

筆者らが「電話で再度」、ジャンヌ文書が「伝えていることは事実だったか、そうでなかったか」とメンゲに尋ねると、彼はいらいらしながら、「完全に空気から取り出されたものは何もない」、但し「この案件は決して公開のためのものではなかった!」と答えた。〔ということは〕彼は「彼の情報源によって自らをより良く描こうとしたのか?」〔と筆者は疑う〕。

他方、「弁護士を通じて」グレルマンは、「私には MfS〔シュタジ〕の“指導将校”と認識可能だったと言われる人物たちと 1989 年にも他の時点でも話したことはない」と言う。

「インサイダーたちは、「シュタジでは厳格な軍事的統制原則が支配していた」のだから、「自由に捏造された諸報告」がまかり通っていたとは「殆ど考えられない」と言う。

「では真実はどこにあるのか」。

メンゲは、グレルマン自身は「我々のところの IM であること

¹⁵ その副題「絶望する者はそれをどこかで学んだ」は、ミュエの「ホーレン」寄稿(7 節)の表題である(Schreiber 2009:192)。

¹⁶ 「作り話」(Legende)によって説得して IM に引き入れる工作はシュタジなど情報機関の得意技であった。青木(2020a:12 節)参照。

¹⁷ ブラガルは 1974 年から西独最初の東ベルリン常駐特派員(南

ドイツ新聞)、1979 年からシュテルン誌に移りボンで議会取材、1983-1990 年再び東ベルリン特派員(東欧 4 ヶ国も担当)(Pragal 2008:カバー)。Pragal(2008)にグレルマンの名が登場するのは 1 ヶ所で、ブラガル宅に来た時、彼女は「まるで窓が〔世界に〕開けられたかのようだ」と語ったと記されただけである(S.64)。

を知らなかったことは間違いない。…私はそれを 100 パーセント言うことができる」と強調する。また彼は彼女に「報告に記載された「義務」を言ったことがない」と繰り返す。「IM としての彼女の〔無断〕登録だけが本当だった」と言う。

それでもメンゲは「彼女もそれ〔IM かどうか〕を質問しなかった」と付け加えた。〔メンゲを警察官だと思っている彼女がそのような質問をしないのは当然だろう。〕

ジャンヌ文書には録音テープ起こしが含まれるので、筆者が録音方法を「ぜひとも聞きたい」と言うと、メンゲが“Stuzzi”と呼ばれるボールペンの中のマイクと、「手のひらより大きい」録音機によると説明した。

メンゲ文書にはメンゲが「ほとんど紙を打ち抜くハードなタッチで」、グレルマンについて、「事案として処理される BRD [=西独] 特派員たちとの種々の接触」を維持させ、「これら特派員たちの引き続き偵察とコントロールのために…利用される」ことになる」とタイプした。

同文書は、「不条理劇」のようであることを別にすれば、どのメモも「考え抜かれていて非常に意味」がある。

メンゲがグレルマンに「1983 年に“人生の伴侶 (Lebenskamerad) が MfS [=シュタジ] との協力のことを知ってはならない」とはっきりと強調する。

この人生の伴侶は「ミュエのことであった」。〔グレルマンは 1982 年にミュエと知り合い 1984 年に結婚し (1 節)、最初の夫カンとは 1982 年に離婚した (2 節)。この「伴侶」にも異説もある (6.2 節) が、少なくとも「知られてはならない」相手は体制批判的なミュエであっただろう。〕

メンゲは「グレルマンはシュタジでの彼の職務について何も知らなかった」と言う。「にもかかわらず、彼がなぜこの指摘〔上記の「強調」の内容を指す〕をしたかという謎は能弁な専門家でも解決し得ない」。

〔この指摘つまり「強調」をしたのは逆で、グレルマンがメンゲに対してしたという理解の記事もある (6.1 節) 。

指摘したのがどちらにせよ、両者間の会話はメンゲが刑事警察官だという作り話の中でなされ、しかも文書の記述から彼女は警察署の部屋でこの作り話を聞いたと考えられる (6.2 節) ので、それを彼女は信じ切っていたに違いない。

だから両者の会話の中ではあくまで警察への協力が「知られてはならない」ということであって、「MfS」という言葉が出るわけがない。ミュエが体制批判的である (青木 2021:6 節) ことは両者とも分っているから、両者とも「指摘」の動機はある。

ではなぜ文書には警察ではなく「MfS」とあるのか。これは「能弁な専門家」でなくても容易に分る。メンゲがシュタジ内の文書に作り話のまま書くことはない。メンゲはシュタジ内では彼女を「MfS の協力者」(IM) と報告しているのだから、内部文書には当然 MfS と書かねばならない。彼はグレルマンにとってのみ警察官である。指導将校は自分の IM と話す時には相手を本名で呼ぶが、報告文書には内部用語である暗号名を書く。この書き換えはこれと逆のケースである。〕

「1989 年 11 月〔文書終了時〕に再びミュエが登場し、「彼の前では“この IM は一貫して陰謀を遵守した。というのはこの男が MfS とその活動を全般的に拒否したからである”」とある。〔彼女は IM と思っていないのだから当然であり、この作文は明らかにメンゲが IM 指導の如く飾り立てるためのシュタジ向け「作り話」である。〕

メンゲは「彼女は、我々が彼女をだますことはない私を信頼していた。そして我々もだまされなかった」と言う。

但し文書には彼女について「平均的な才能だけ」とか、「道徳的な関係においてこれまで社会主義の規範を遵守していなかった」とある。しかし「幹部調書によるとメンゲ自身がその問題を抱えていた」。

〔「平均的…遵守していなかった」という部分は IM Tuspo によるグレルマン監視の通報である (6.2 節)。〕

グレルマンの IM ジャンヌ疑惑について「メンゲによる潔白証明書」が出たが、メンゲが「証人として役立つかどうか」は「宣誓証言をして初めて分る。というのは、「Super-Illu.」のために作成されたシュタート (Jochen Staadt) 』らの「科学的鑑定」〔ベルリン自由大学 SED 国家研究協会のそれ〕が、シュタジ文書はグレルマンを「明らかに MfS の非公式協力者として証明する」と言うからである。

〔SED 国家研究協会創設メンバーの 1 人であるシュタートは、Müller (14.01.2008) によれば、「“現存する様々な起源の MfS 文書はグレルマン女史を MfS の非公式協力者として明確に証明している”と判断した。〕

そのため法的争いの「状況はいまかなり混乱し」、「一層とげとげしさを増している」。

〔メンゲが実際に宣誓証言をしたという情報は得ていないが、Leinkauf (21.06.2006) によれば、メンゲは「グレルマン女史を彼女の知らないうちに IM として操縦したと宣誓証言する用意がある」し、「刑事警察官という作り話のもとに彼女とはたった 2~3 回だけ会ったと彼は言う。自由大学のグループの「科学的鑑定」は法廷で採用されなかった (3 節) 。

なお、この映画のずさんな時代考証を担ったヴィルケ (Manfred Wilke) はこの鑑定当時 SED 国家研究協会の責任者の一人でもあった。〕

すでにドナースマークとミュエは〔仮処分によって〕グレルマンへの IM 非難を中止し、出版社はその本 (Donnersmarck 2006) の該当部分を黒塗りにしなければならない。そのことは彼らに「DDR の検閲を思い出させる」。

グレルマンには弁護士を通じて 2 回インタビューを申し込んだが、実現しなかった。〔死の 3 ヶ月前の重病だった。〕

メンゲは自分を「あまりひどく書かないでくれ」と頼んだ。Schreiber (29.04.2006) 紹介は以上である。

6. シュタジのジャンヌ文書とグレルマンの宣誓供述書

シュタジ文書保管庁 (BStU) はミュエによるグレルマン IM 非難がセンセーションになるやいなや、シュタジ少佐メンゲが現役時代に作成した報告文書 (メンゲ文書、522 ページ) のうちのジャンヌ文書 (150 ページ) を閲覧可能にし、早速各紙誌がその内容や関係者との会見結果、法廷の様子などを報じた。そのうちの一部を紹介する

6.1 シュピーゲル誌 (2006 年 4 月 29 日) から

まずメンゲ文書をシュピーゲル誌の報道 Deggerich (2006) 18 がどのように読んだか、またメンゲやミュエとの会見を紹介する。やはりベルリン州裁判所による仮処分のあと、最初の判決よりも前、2006 年 4 月末の記事であり、グレルマンの主張に否定的である:

¹⁸ この記事も大方の批評同様、ミュエは、「芸術家ペアを監視するシュタシ大尉」だが、「政権とその幹部に絶望し、陣営を取り替え

被盜聴者を守る」役を演じたと誤解した (青木 2021, 2020b 参照)。

ドイツでは「すでに[2006年4月末時点で]65万人を超える人々」が見た映画「他人の生活」は、同時にシュタジについての「新たな、部分的には白熱する議論を引き起こした」。

議論の1つはこの映画の主演ミュエ自身が引き起こした。彼は「監督によるインタビュー」[Donnersmarck(2006)所収]の中で「元妻[グレルマン]がシュタジのために働いたと非難した」。しかし1990年離婚した彼女は「いかなる“秘密情報活動”も否定した」。

彼女の弁護士は、[この事件当時]ドイツ連邦議会左翼党院内会派会長のギジ(Gregor Gysi)¹⁹と同じ法律事務所所属で、ベルリン州裁判所から、該当部分の「黒塗りでのみ販売」という「仮処分」を獲得した[Donnersmarck(2007)は該当部分の削除版]。ミュエもグレルマンへのIM非難を禁じられた。

西側ジャーナリスト対策担当のシュタジ第II/13部[の第2課長]少佐メンゲが、1989年12月13日に過去10年の数百ページ[522ページ]に及ぶIM文書を紐で縛り鉛の封印を付けた[文書終了は11月17日(5節)]。その中に「ジャンヌ」(Jeanne)という暗号名のIMの報告が含まれていた。

[この日は壁開放1ヵ月余りあとであり、エアフルトを先頭に各地で機密文書焼却・隠匿の防止のための市民によるシュタジ県支部占拠が12月4日から始まった時期である。翌年1月15日にはシュタジ本部も占拠された。]

メンゲは東ベルリンのマキシム・ゴロキエ劇場の女優であったグレルマンに目を付けた。彼が「階級敵」と見なして監視する[西独誌シュテルン特派員]「ブラガルの知人グループ」の中に、彼女がいたからである。

[俳優を含む芸術家担当はシュタジ第XX/7部だが、他方西独特派員監視は第II/13部第2課担当であった。この場合の彼女は標的ではないから担当部局間の軋轢はない。]

メンゲ文書によると、彼は彼女に、「1970年代末」[1979年3月]に「作り話による接触」を開始し、IM候補²⁰を経て、1980年秋にIMに同意させ、「IMSのレベル」に対応する立場が達成された。

[IMの主要カテゴリーIMSは補注にあるように、IM規定の上ではIMの中でも高度なレベルを必要とする。メンゲはどうせ作り話の関係だから、自分の手柄のために粉飾して、彼女を「IMSのレベル」にあると報告したのだろう。

なお、上記の1980年の同意について、Pergande(29.04.2006)には、「当初2人[夫カン(IMフランチとグレルマン)]が共同でシュタジにとりわけ西側ジャーナリストとの彼らの会話についての情報を提供し」、「1980年にシュタジは、IM“ジャンヌ”が文書による義務約束なしに秘密情報機関のために働くだろうとメモした」とある。ここに言うシュタジはむしろグレルマンにとっては刑事警察官ホルムである。]

メンゲは彼女のIM候補としての暗号名を「グリレ」(Grille、コオロギ)としたが、その後本人が「ジャンヌ」を選んだと記されている。メンゲは彼女のIM協力について、「知識人や教会関係者を扱う際の全く通常のやり方」と同様に、「文書による誓約書を取るつもりがなかった」と言う。

[実際には多数の作家らの誓約と本名の登録例がある(Walther 1996)。但し体制転換以前にもシュタジ自身がIM文書を破棄した場合やIMの「人物調書」のみ、あるいは

「特に[IMの]負担になる文書(誓約、手書きのIM報告、領収書など)」のみ破棄したことがある(同前:473f.)。なおこの映画も女優クリスタにIMとしての誓約署名をさせた。

裁判ではグレルマンの署名入り誓約がないことが彼女を有利にするが、それだけが彼女の勝訴理由ではない。]

メンゲの文書によれば「IMジャンヌ」は、「劇場の様子のような一般的な情報」や「DDR俳優の西側特派員との接触」などを伝えた。それらの「情報は作戦上の価値が高い、このIMが人物たちを不利にした」と同文書は1982年1月に誇った。

しかし1983年6月にメンゲは「このIMとの協力が中止されるべきかどうか」を決定するように勧告した。

同年11月22日のメンゲの記録では、「人生の伴侶がMfS [=シュタジ]との協力のことを知ってはならないとIM[ジャンヌ]が指摘した」。

[メンゲがジャンヌ(=グレルマン)にこのように言ったと理解した報道もある(5節)。ここに「MfSとの協力」とある理由についても5節参照。]

続けてこの記事は「この時点でグレルマンは彼女の最初の夫と別れ、ミュエと愛人関係にあった」と記し、「伴侶」をミュエと見た。「[伴侶]には異説もある(6.2節)。」

ミュエについては「“ジャンヌ”文書には報告がひとつもない。そしてミュエも彼自身の犠牲者文書[シュタジ文書]の中に“ジャンヌ”への言及をひとつも見つけなかった」。「ミュエという言葉はジャンヌ文書終了時にある(5節)。」

ミュエ自身も当時はグレルマンのシュタジ協力について「何も予感していなかった」。

「1984年2月頃にはこの情報源が明らかに枯渇する」というのは文書には情報源の「決定的な欠陥」とIMの個人的な危機が記され、情報源が「集団の中での無視」と「同僚との隔たり」を体験しているとあり、また[標的的]記者ブラガルとの「関係の継続への自己の関心を殆ど」示さないともある。

[ブラガルは1979年に西独取材に戻ったが、1983年から再び東ベルリン特派員になった(脚注17)。

しかし、IM中止かどうかについては、「IM自身はMfSをサポートする用意がある」というメンゲの所見ゆえに、その後も彼女のIM終了は決定されなかった。しかし「メンゲの仕事にとって“ジャンヌ”は、西独特派員との関係の欠如のため役に立たない」ことになった。

メンゲのメモには、1989年11月3日の最後の話し合いの際に、「ジャンヌ」が今後の協力を拒否したとある。これはアレキサンダー広場での大規模集会・デモの「前日」であり、その集会ではミュエも「演説した」。

この話し合いによりメンゲは、グレルマンがミュエに、メンゲ[グレルマンにとってはホルム]との「協力について何も漏らしていないこと」を知り、「満足したように思われる」が、同時に「“ジャンヌ”がいま自ら今後の協力を拒否したとこの将校はメモした」。

[協力拒否とその後の壁開放やシュタジ占拠の動きによりこの文書は密封となった。]

文書には「同意した会合期日や点検可能なメモ・会合」などがあり、「多くのことが明確だと思われる」。

しかしグレルマンは宣誓供述書(2006年4月10日署名)

¹⁹ ギジは1989年11月4日の東ベルリン大規模デモを届け出によって合法的に実現する可能性を提案した弁護士であり、改革されたSED党首に就任した。左翼党はSED後継政党。

²⁰ 「IM候補」(IM-Vorlauf)はIMとして獲得する候補で、IM-Vとも記す。この記事ではVorlauf-IMと記されている

の中で、「いかなる時にも私が意図的に旧 DDR の国家保安省と協力したことはない。特に私が非公式協力者として誓約したことは決してない。私は 1989 年 11 月にもその他の時期にも MfS の指導将校だと私に知られていたとされる人物たちと会話したことがない」と記している。

いまや年金生活のメンゲは、グレルマンの弁護士とも会うなど久しぶりの「需要」に「上機嫌」であり、今日は次のように言明した：

グレルマンには刑事を装う「作り話」で接近した。グレルマンと会ったのは 1 回か 2 回であり、「規則通りの IM 文書」も作成された。

「しかし諸情報が長年にわたり他の情報源からも集められ、暗号名“ジャンヌ”のもとに整理された」。

「それによって MfS の他の諸部に対して「本物の」IM 文書と見せつけることができ、脚本のように作り上げられた」。メンゲは「それはすべて、ジャンヌが他の将校たちと協力することを防ぐためだけのものだったと称する」。

〔シュタジ最後の大規模作戦「邪魔者」(出国運動とその関連の処理)や Plenzdorf (1995) 所収のアンソロジー事件についての作戦「自主出版」など、私が見た重要作戦では、個々の IM が指導将校との会合の場で通報し、その内容を指導将校が所属職務単位へ、どの IM の通報かを明記し、末尾に自分の職位と姓を記したタイプ印字の文書報告をした(タイプ印字)。これが IM 文書である。

各 IM 通報は玉石混淆でありシュタジとしての分析・評価が不可欠であり、また各 IM の活動評価の必要もあるから、各 IM の通報は別々に明記された。多数の IM の通報を総合した分析報告もあったが、その報告書にその旨が明記された。

メンゲのように他の将校による IM 流用防止のために偽造するというケースがどの程度あったのか分らないが、このケースでは処理対象が単なる監視ゆえにあり得たのかもしれない。しかし少なくとも OV(作戦事案、明白な容疑の処理)や重要作戦ではあり得なかつただろう。]

グレルマンやメンゲの言い分に対して研究者たちは、シュタジ文書の「細部のすべてを信じるわけではないが、その種の文書がまるごと発明されたということはあると考えている」。ところが裁判の「趨勢」では、IM としての本人の署名のある誓約または手書きか署名のある通報文書がある場合のみ IM と認められる。これらは「すべて“ジャンヌ”文書にはない」。

だが「ミューエは引き下がるつもりはない」。彼は「仮処分は納得できず」、「率直に語るができるようになりたい、“そうでなければ私は自分史を避ける感覚になる”」と言う。その感覚を彼は「DDR 感覚」(DDR-Gefühl)と名付けた。

だから彼は、裁判所から要求された[該当発言の]「中止表明」に「署名しない」と言う。(以上 Deggerich 2006 から)

(補注)シュタジ密告者カテゴリーIMS とは

国家保安相ミールケは 1979 年 12 月 8 日付けで「IM および GMS(社会的保安協力者)との活動のための方針 1/79」(ZAIG 26648)を発し、翌年初めから有効とした。

これは 1968 年の IM・GMS 方針の改訂であり、その文面から、1976 年制定の OV 規定(青木 2021b:2 節)に対応するための改訂であることが明らかである。

方針 1/79 のうち「2. IM の機能とその活動への要求」の冒頭には、「IM によって解決されるべき政治的・作戦的課題の多様性と複雑さ」と、「そこから生じる異なる客観的・主観的要

求に応じて以下の IM カテゴリーを定める」とある。

「IM カテゴリー」の筆頭が IMS であり、IMS は、「政治的・作戦的浸透と責任分野の保安のための IM」(原語は略語欄参照)と定義された。次いで IMB(敵対活動従事者処理)ほかのカテゴリーが挙げられた。

IMS はシュタジの中で「最も頻繁に見られる情報提供者のカテゴリーであり、[シュタジの]最後には 93600 人」いて、「容疑事実を見分け」、「高度に予防と損害防止」に務める責務を負った。なお 1968 年の方針では IMS の定義は、「社会的な分野または施設の保安を委託された」IM であった。(Engelmann 2016:174)。

以下は方針 1/79 の「2.1. 政治的・作戦的浸透と責任分野の保安のための IM(IMS)」の抜粋である。これを読めば、シュタジまたはミールケに対してしばしば指摘される妄想症ぶりが分ると思う。以下のような、念には念を入れた文章は方針 1/79 全体に延々と続く。担当将校は読むとしても、毎度のことゆえ肝要な部分以外は斜め読みしたのではないかと思う：

IMS 投入目的は：

- ・「保安政策上の課題の全面的な遂行のために重要な意義を持つ責任分野、特に政治的・作戦的重点分野における分野、過程、人物、人物グループを見分け、保安するための情報の入手」
- ・「危険や、作戦上重要な出来事と事情、それに関連する人物並びに有害事件の発生原因の確認と解明」
- ・「OV 処理における部分課題の実行」
- ・敵が注目する「人物または人物グループ」と、それらへの敵の「計画や企図、措置」の試み、「影響」行使の可能性についての「情報の入手」
- ・「作戦上重要かつ関心のある人物」に対する「コントロール措置のような政治的・作戦的保安措置の実現」
- ・「作戦および投入の際の協力」
- ・「社会主義的合法性や、保安、秩序、規律の作戦上重要な違反の確認と偵察」
- ・「助長する条件や状況の見分けと除去並びにさらなる予防・損害防止措置の導入と実現」
- ・「作戦的な探索・捜査・監視という部分課題の解決」
- ・「作戦地域内および作戦地域向けの事案関連および人物関連の活動のための更なる政治的・作戦的に有益な接触や結び付き、可能性の情報の入手」。

「IMS への本質的な要求」は：

- ・「職業上または社会的な活動と地位、そこから生じる義務と権利、接触、結び付き、影響可能性、並びに必要な利用可能時間のようなその課題遂行の客観的な可能性」
- ・「MfS との安定したきずなど長期的かつ誠実な協力を保証する性格上の資質および政治的・道徳的な資質」
- ・「人との付き合い能力並びに人生経験」
- ・「陰謀保持と秘密厳守並びにスキルだけでなく作り話や陰謀による任務遂行ないしは作戦的手段・方法の適用への対応姿勢と能力」
- ・「投入分野の社会的諸関係についての知識と作戦上重要な事情や現象、行動の見分け、並びに作戦上重要な情報の入手にのための能力」。

6.2 ベルリン新聞(2006 年 5 月 3 日)から

ベルリン新聞(BZ)掲載の Sylvester(03.05.2006)も仮処分後、最初の判決前の記事である。

その中で記者は、TSP 紙がメンゲに会ったこと、そこでメン

ゲが、グレルマン自身は「知ることなく IM として登録され、[IM 協力の]誓約もされなかった」し、「彼女が本当は誰と話しているのかを知らなかった」などと説明したことを紹介し、「結論としてこの件は無罪判決である」と断言した。この TSP 記事は、明記されていないが、Schreiber(29.04.2006)である(詳細は 5 節)。

記者は、グレルマンが本紙(BZ)とインタビューを約束したが、病状悪化のため「前夜に」キャンセルしたので、その代わりに[BStU が公開を決めた]黒塗りが多いジャンヌ文書を読むしかないとして、以下を紹介する:

西独の東ベルリン特派員プラガルとその妻の知人であるグレルマンが、シュタジにとって「魅力的になった」.[プラガルの略歴は脚注 17 参照。西独特派員監視を担当するシュタジ第 II/13 部第 2 課課長メンゲ(表 1)が監視に当たった。]

少佐メンゲは 1979 年 3 月に「刑事警察官」の「ホルム」と名乗って、「マキシム・ゴーリキー劇場から西側特派員へ情報が流れている」という「匿名の西ベルリン人」からの偽手紙を持ってグレルマンに近づく。文書によればメンゲは「ホルムとして」、この「作り話の信頼性を根拠づけるために」彼女に人民警察の部屋に来てもらう」という作戦まで考えた。

[5 節にはミュンヘンのホテルのレター用紙とあるが、それを西ベルリン人が使ったという作り話かもしれない。]

当時グレルマンの夫[上記の映画監督カン]であった IM フランツが、彼女は「MfS に協力するという感覚にとてもまっすぐに面と向かっているわけではない」と助言した。[だから作り話作戦になったのだろう。]

「“ジャンヌ”文書にはグレルマン自身が書いたドキュメントは存在しないが、「ジャンヌが話した」ことは記載されている。メンゲは TSP 紙に「ボールペンに仕込んだマイクでひそかに会話を録音したと語った」[5 節]。

ジャンヌ文書のうちの「若干の書類は[シュタジの]第 26 部から来ている」。つまり電話盗聴の結果である。

[この文書にあるように実際には盗聴は第 26 部が行なった(青木 2020b:脚注 19、同 2021b:10 参照)。この映画のように第 XX/7 部大尉が自ら盗聴するという事はない。]

文書によれば、グレルマン自身も探られ、「IM Tuspo」が、「彼女は平均的な才能しかなく…“道徳的な面では従来まだ社会主義的規範を尊重したことがない」と書いている。

「文書の状況によれば」グレルマンは端役を嘆いたり、劇場内の噂話などを伝え、「西側との接触を探し通報した」。

また T.ラングホフ(Thomas Langhoff)²¹についての通報として、「彼は多くの特権を持っているので、DDR を離れることは決してないだろうと書かれている」。

[これについて記事には、T.ラングホフはいま「彼女は正しかった」云々と言う、とあるので、本人も記者もグレルマンの通報とみている。むしろその際グレルマンはシュタジあてではなく刑事警察官あてに話したことになる。]

「メンゲはすべての証言に彼の文章力をもって絡む」。例えば「政治的・作戦的に価値のある報告」、「計画された[IM との]会合活動」、「さらなる陰謀的協力」、「なされた吸い上げ」といった[成功を示す]言葉である。

[これらの言葉は「彼の文章力」というわけではなく、シュタ

ジの作戦報告文書に頻繁に登場する常套語句である。

「吸い上げ」(Abschöpfung)は、シュタジ絡みであることを隠しつつ「安定した個人的なつながりを利用して情報を得ること」である(Gill 1991:85; Suckut 1996:36)。「吸い上げ者」(Abschöpfer)は、IM などシュタジ協力者のほか偽装したシュタジ職員である(Gieseke 2006:212)²²。この場合はホルムに偽装したメンゲが吸い上げ者であった。吸い上げは西独情報機関 BND の用語では「会話偵察」(Gesprächserkundung)であった(Suckut 同前)。

他方でグレルマンについて、「作戦的接触は後退した」、「彼女の政治的な基本知識は強化されていない」、「IM が[協力を]避ける」といった[否定的な]記述もある。

1983 年 11 月 21 日のメンゲ(ホルム)との会合でジャンヌ [=グレルマン]が「人生の伴侶が MfS との協力について知ってはならない」と言ったと文書にある。

、「いくつかの新聞」がこの「伴侶」をミュエと推測するし、「たぶんミュエもそう思うだろう」。しかしそうではなく、「マキシム・ゴーリキー劇場」で働く「もう一人の別の伴侶がいた」。(以上 Sylvester 03.05.2006 から)。

[前年に離婚したカンも、1983 年にはすでに知り合っていたミュエもゴーリキー劇場で働いていなかった。]

6.3 ベルリン新聞(2006 年 6 月 21 日)から

法廷の展開を、判決の少し前に Leinkauf(21.06.2006)が伝えた。その核心部分は:

論点は、「ジャンヌ」文書が「シュタジへのグレルマンの報告を含む文書なのか」(ミュエ側の主張)、それとも「それはシュタジ少佐メンゲが、本当はグレルマンを[IM として]手に入れていなかったが、この戦利品をあきらめなくなかったため、1980 年代の初めに組み立て、勝手に構成した文書なのか」(グレルマン側の主張)である。

但し「ジャンヌ」文書はそれを含むメンゲ作成文書(「グレルマン文書」)のうちの「はるかに小さな部分である。このことはほとんど知られていない」。

[前者は「約 150 ページ」であり、全体(522 ページ)のうちの 3 割弱である(5 節)。]

裁判でミュエ側は、ベルリン自由大学 SED 国家研究協会(記事には SED 独裁研究協会とある)の「科学者たちの鑑定」を根拠に、「メンゲが事案全体を発明したということはある得ない」と弁じた。

グレルマン側では、彼女の「友人たちが対抗鑑定を作成し、それを弁護士ランガーが拠り所」とした。

対抗鑑定は、文書にある「20 回余の[メンゲとジャンヌの]会合のうち 5 回が実行不可能であった」証拠を見つけた。マキシム・ゴーリキー劇場の「精密につけられた舞台記録」によれば、その日時に彼女は舞台上に立っていた。

記者は、これを「重大な論拠。これら 5 つの会合が偽造であれば、なぜ他の会合もそうであり得ないのか」とコメントする。

またメンゲは、「彼がグレルマン女史を彼女の知らないうちに IM として操縦したと[法廷で]宣誓する用意がある」し、「刑事警察官という作り話のもとに彼女と 2~3 回だけ会った」と言う。

²¹ W.ラングホフ(脚注 9)の息子で、父同様に著名な演出家・俳優・劇場責任者、1984 年東独国家賞(Nationalpreis der DDR)、両独で活躍した(Müller-Enbergs 2010:767)。

²² Engelmann(2016:21)によれば、吸い上げ者は IM と GMS であり、彼らから「指導将校への意識的または無意識の情報提供」も意味する。

文書は「弁護士ランガーが説明するようにグレルマンの通報ではなく、開封された手紙や盗聴された通話、他の IM からの通報から作成されたメンゲの報告なのか？捏造された IM。それはセンセーションだろうとドナースマルクは言う。そして彼は正しい、それはまだ存在したことがない。ドナースマルクはそれを疑う。真実は何か？」。

ミュエの弁護士は、グレルマンの最初の夫カンがシュピーゲル誌への発言（未印刷）の中で、「“国家権力”との二人のつきあい」について「我々を」とか「我々は」と語ったことを根拠に、「刑事警察官と話していると当時は信じていたというグレルマンの説明を認めない」。

「裁判官は今や、グレルマンが意図的にシュタジに協力したとミュエが主張してよいかどうかを決定しなければならない」。(以上 Leinkauf 21.06.2006 から。)

この記事の 2 週間後に出された判決は、グレルマン勝訴、ミュエと出版社の敗訴であった。

なお、この記事の冒頭部分には、「真実とシュタジ文書。経験が示すように、ほとんどの場合これは適合している。署名付きの IM 誓約があり、[IM による]手書きのスパイ報告がある。しかしこのケースは異なる。署名がなく、グレルマンによって書かれた報告はない。芸術家や知識人の場合シュタジは通例それらを断念した」とある。

しかし上記(6.1 節)のように、大作戦「邪魔者」や作戦重点「自主出版」などでは、IM 文書は IM による会合または電話での通報の指導将校によるタイプ報告であり、本人直接でも手書きでもない。通報についての指導将校の評価もシュタジの状況認識と作戦判断にとって重要だったからである。

7. グレルマンの長女ジャンヌの父 T.ゴグエルの失態

T.ゴグエルは「湿原兵士の歌」作曲者 R.ゴグエル(脚注 9)の息子で、グレルマンの長女ジャンヌの未婚の父である。

グレルマンの葬儀では「300 人以上」の弔問客を前に T.ゴグエルが、「ここ何週間かに多くの大見出しの原因となった物語」[ミュエによる彼女への IM 非難]を取り上げ、「我々のうちの誰も予期しなかったであろう方向から告発がやって来た。それは不必要かつ不道德だった。すべて映画を売り込むためだけだった」と語った(ビルト紙 Kascha 9.08.2006)。

この弔辞をビルト紙のこの記事は「感動的な言葉」と紹介し、また T.ゴグエルを「最初の夫」としたが、実は未婚の父であった。記事の副題は「シュタジの過去をめぐる争いは墓場まで続く」であり、末尾に「墓場でもシュタジ争いは続いた。それはそこでも終わるか？」とある。3 年後に裁判としてはグレルマン勝訴で最終決着した。

T.ゴグエルは、当時シュテルン副編集長のシュルツ(Christian Schertz)らが編集した「人身攻撃とメディアの犠牲者」と題する本²³に、ミュエによるグレルマン非難を「不必要かつ不道德」とする寄稿を寄せた。

ヴェルト紙上でミュラー(Müller 14.01. 2008)が、この寄稿は本書の趣旨に反しており、「ミュエに疑わしい動機を押しつける」ことによって、ミュエに対する「人身攻撃の罪を犯している」、だから本書の序文にある「人身攻撃は誰かの評判を落とすためになされる」という言葉はまさにこの寄稿に該当する、にもかかわらずそれを見逃した責任が編集者たちにもあると、批判した。

「[疑わしい動機]とは、ミュエのグレルマンへの IM 非難(Donnarsmarck 2006 など)はこの映画の宣伝のためだという T.ゴグエルの主張を指す。」

ミュラーはさらに、編集者はそもそも T.ゴグエルが「どう人物かを問うべきであった」と批判し、彼の素性を明かした。

ミュラーによれば、T.ゴグエルはこの本には「自由著述家」とあるが、元東独外交官、ドイツ統一後は保険会社(Mannheimer AG Holding)のマネージャーであり、外交官時代に「シュタジに協力し」、シュタジからの「受益者」でもあった。彼は、外務省儀典部職員としての西側情報機関への協力疑惑ゆえにシュタジ防諜部門[メンゲも所属の第 II 局]が接触してきただけだと弁解した。しかし彼の IM 文書には複数の「手書き報告」や 1986 年 7 月 29 日提出の「手書きの守秘誓約書」という証拠がある。

また、この寄稿は、ミュエの彼女への IM 非難が「メディアの中でいわば映画の真実性のための実生活からの証拠として映画“他人の生活”の宣伝キャンペーンの一翼」を担って、「シュタジというテーマがなお一層増幅され」たと主張した。

それに対してミュラーは、ミュエはすでに 2004 年に文学雑誌「ホーレン」(die horen)への寄稿[表題は脚注 15]の中で「かなりの間私の妻はシュタジに協力していた。それが DDR であった」と書いたのだから、この動機の憶測は当たらない、と反論する。

他方でミュラーは、この寄稿では、この「シュタジ映画における役がこの俳優[ミュエ]にとって、DDR 独裁の最も暗い側面と改めて取り組み、自身の歴史を確かめる内面的なきっかけ」となり、「その結果として彼が彼の体験や BStU で彼が知った事実をおおやけにしたという可能性が考慮すらされていない」と批判する。

[この批判と、直前の段落にある彼ミュラーの反論は両立しない。この段落においてミュラーも今回の IM 非難がこの映画絡みであることを認めるのだから、ホーレンで言及したことをミュエが再論しても不思議ではないからである。]

[8.3 節]で紹介するように、Donnarsmarck(2006)の中のインタビュー(2005 年 10 月)におけるミュエのグレルマン非難は、彼は「それについて話すつもりがなかった」にもかかわらず、ドナースマルクが「4 時間ミュエと話し、ミュエが自らそれに言及することを絶えず希望した」結果の発言であった。だからドナースマルクには明らかに宣伝への利用意図があっただろう。結局それに応じたのだから、ミュエも同調したと見られてもやむを得ない。実際にミュエの今回の IM 非難はホーレンの際とことなり各メディアで大きく取り上げられ、T.ゴグエルが言うようにこのシュタジ映画への関心を「増幅」し、映画の真実性宣伝に手を貸し、フィクション部分の覆い隠しに役立った。

またこの映画とグレルマンのケースは、彼女が実際に IM になったと仮定しても、ミュエのケースとの違いは大きい。クリスタは自らのドラッグ乱用で拘束され、それを逃れるために恋人ドライマンの反体制行動を証言してから IM になった。メンゲがグレルマンを IM にしたかった時の夫は IM であり、メンゲに協力していた。メンゲと夫が彼女に IM 協力の見込みがないと見て刑事警察の作り話になった。だから、ミュエがクリスタとグレルマンを同一視して怒りを募らせたのは筋違いであった。]

ミュラーによると、ミュエは確かに「有名な芸術家として

²³ Schertz, Christian u. T. Schuler (2007) *Rufmord und*

Medienopfer; Ch. Links. 私は未見。

DDR 内で特権を与えられていた」が、シュタジへの協力を「厳しく拒否し」、そのため、シュタジに「狙われた」。

[ドナースマークらによるインタビューの中でミュエは自身のまわりの IM を列挙した(青木 2021:6 節)。そこにジャンヌは出てこない。なお、ミュエのシュタジ文書に「ジャンヌ」からの通報がなく、ジャンヌ文書にもミュエの名前は登場する(5 節)が、彼についての通報はない(6.1 節)。ミュエもジャンヌが彼についての密告者ではなかったことを知っている(8.2 節)。もしグレルマンが本当に IM で、シュタジがミュエの危険度を上げれば、監視にジャンヌも動員しただろう。]

彼は「死の前に歴史家シュタートに彼の犠牲者文書[=彼についてのシュタジ文書]の閲覧を許した」。その結果、彼の IM 文書の抜粋が BStU によって公開された(一部黒塗り)。

そこに「グレルマンの指導将校[メンゲ]が彼の女性情報提供者[グレルマン]と個人的問題について話した」内容として、「彼女は「彼女に依存せず彼女が仰ぎ見るパートナー」を探していて、「ミュエ(ドイツ劇場の俳優)がこれらの願いに近い。彼女の希望では、MfS が保安上の疑念を抱くなら、私が相応の適切な示唆を与えるべきだろう」という記述がある。

T.ゴグエルはこの記述を知らないか、「具合が悪い」ので無視したが、この報告を受けてシュタジは「ミュエに対する一連の調査を開始した」とミュラーは言う。

[シュタジのミュエ文書のこの記述はとても興味深い。但しミュエは、彼自身が話したように、高校時代にピアマン追放抗議署名を級友に呼びかけ、[そのせいか高卒直後の]兵役時代に彼が投函したが届かなかった手紙が彼のシュタジ文書の中にあつた(青木 2021:18)。だから彼がシュタジの監視対象になった高校時代、遅くとも兵役時代からであつて、上記のミュラーの「調査を開始」推測は間違っている。

この記述は文化人等担当職務単位である第 XX/7 部のミュエ担当 IM たちの指導将校にメンゲが話した内容に違いない。これによって第 II 局のメンゲと第 XX 局ないし第 XX/7 部がミュエについての情報交換していたことが分る。

その際、もしグレルマンが IM なら、文書には「グレルマンの指導将校」という記述ではなく、例えば「IM ジャンヌの指導将校の情報によればグレルマンは…」というように記すはずである。彼女は、メンゲの言うとおり、やはり IM ではなかった。

グレルマンが上記の「個人的問題」を話したのが事実とすれば、むしろ彼女は彼女の「指導将校」ではなく「刑事警察官ホルム」に話し、「MfS が保安上の疑念」ではなく、「警察が疑念」を取り上げた。それをメンゲが作り話からシュタジ内部用に翻訳して第 XX/7 部に話した。

当時東独では誰もが、とりわけ知識人・文化人・学生に至る所にシュタジの目と耳があり得ると思っていたのだから、彼女もあるいはホルムの職業に疑問を持ったかもしれないが、彼女の来歴から来る忠誠心ゆえに警察には市民として協力するという姿勢であつたと考えられる。

というのは、彼女の両親は「功績のあるナチ抵抗闘士」の実績のもとに東独の社会主義建設に参加したのであり、「まわりの皆が“それは正しい!”と言い、彼女が政治的秩序に疑問を持つ理由はなかった」からである。だから彼女自身が「体制の欠点を見る目」は養われず、自らも「思考というものが私から奪われた」と語った(Buß 18.06.2008)。]

ミュラーの批判に T.ゴグエルと編集者はどう対応したか。「解決は驚きだった。2008 年 3 月出版の第 2 版にはもはやゴグエルの論文は含まれていなかった」。

奥付によれば、T.ゴグエルの寄稿は「著者の要請により」

削除された(Voigt 2008:167)。

8. インタビュー:互いの怒りと苦悩

ベルリン州裁判所の判決(2006 年 7 月 4 日)前後の二人へのインタビューは、ドイツ統一後も続く東独文化人の体制後遺症と苦悩・苦闘を物語る(<>内が質問)。

8.1 グレルマンに(シュテルン誌(2006 年 7 月 30 日))

判決 26 日後、死の直前のグレルマンへのシュテルン誌のインタビュー(Stern 30.07.2006)(要旨):

同誌の前書きから:「DDR の最も著名な女優の一人」かつ統一ドイツでも「高い需要があつた」グレルマンが、「彼女の評判のために闘う」。彼女は IM ジャンヌとして東ベルリンの西側特派員をスパイしたとすでに 2001 年に「大見出し」になつたが、この非難が、元夫ミュエの発言をきっかけに、「映画“他人の生活”公開時に改めて持ち上がった」。この非難を「重病のがん患者グレルマンは断固として否定している。ベルリン州裁判所が最近下した判決によれば、ミュエはもはや彼の元妻がシュタジの“非公式協力者”(IM)であつたと主張することが許されない」。

<この判決はあなたにとってどれほど重要か>

「ほつとした」。法廷闘争のつもりはなく、彼もその弁護士を通じて「すでに示談に同意していたが、しかしすぐにそれを撤回し、裁判手続きを優先した」。

<IM ジャンヌ文書が初めて報道された 2001 年には「なぜそれに法的に抗弁しなかつたのか」「なぜ今なのか」>

「当時私はそれとは全く関わりがないと言つた」が、弁護士の勧めで法的対処をせず、弁護士がメディアと解決し、「この件はその後非常に急速に静まり、忘れられた」。映画絡みでミュエの今回の非難が発表され、「残念ながらそこからキャンペーンが生じ」、「今は残念ながら別の状況」になつた。

<ここ数ヶ月インタビューに応じていない。なぜか>

私は「正当化」も「弁明」も必要としない。「それが真実ではない」から、「論駁することは何もない」。「それは私の身には起こらなかつたこと」だからだ。

<この IM 文書を初めて手にした時にあなたの頭に何が浮かんできたか>

「私はほとんど気が狂つた」。「私はそれへの対処の仕方が分らなかつた」。そこでは「会つたことがない人々」、「全く知らない人々」のことを話したことになつてた。

<文書によると特にシュテルンの東ベルリン特派員ブラガルをマークさせられたことになつている。いわゆる「犠牲者」ブラガルはどのように反応したか>

「私は彼にこの文書を見せた。すると彼は文書を作つた男を見つけ出し、「私の知らないうちに、そして私の背後で、…どのようにこの男が情報を作成し、私名義にしたか」を明らかにした。彼は「彼自身の[シュタジ]文書の中にも私について確実なものを何も見つけることができなかった」。

<シュタジのスパイという非難は健康な人間にも大きな負担だが、[重病の]あなたはどのように耐えているのか>

「私はそれを終わらせなければならぬのでこれまで頑張つてきた。いわば死ぬまで。それは私の娘たち[長女ジャンヌと次女アンナ]のおかげだ」。

<その文書の詳細を検討したことがあるか>

「友人たちが調査し、文書を詳細に分析し始めた。彼らは[文書の中に]私の説明を確認する明らかに辻褄の合わないことを発見した。彼らはそれによって私の弁護士をも支えた」。

〔例えば指導将校との会合日時に実際は彼女が舞台上に立っていたこと(6.3節)。〕

＜ミュージエはこの件でのあなたとの話し合いをすでに2001年に望んだと言う。なぜそうしなかったのか＞

「多くの友人たちと違って、彼自身は当時私に連絡することもなかった」。「ミュージエ一家と私の間には、全く別のプライベートな理由から、当時すでに長く一種の氷河期が支配していた。私が望んだとしても、互いに話し合うことは簡単には可能でなかった。…もちろん私は我々の娘のアンナと話した。彼女はこの冷酷さに最も苦しんでいる。ちなみに、私は不法なことは何もしなかったの、ミュージエに対して自分を弁明する必要はない。私の名前が悪用された、それがすべてだ」。

〔「氷河期」の理由は語られていないが、当然、離婚原因(ミュージエがロータールに「夢中」になった)や彼の3番目の妻ロータールの東独嫌い(8.3節)などが考えられる。〕

＜ミュージエがこの非難にこれほど頑固に固執するのはなぜか＞「分らない」。

＜これからどうなるだろうか＞

「分らない。…判決によって私の名誉回復への第一歩が踏み出されたことを私は喜んでいる。私にはもはや多くの時間が残っていない」。

8.2 ミューエに(ビルト紙 2006年6月5日)

判決の約1ヵ月前のミュージエへのビルト紙のインタビュー(Brandenburg 05.06.2006)(要旨)：

＜元妻(グレルマン)は末期のがんなのに、なぜ法廷で争うのか、「やましくないか」＞

彼女が「裁判所に助けを求めた。私がそうしたのではない」。「映画についての本[Donnersmarck 2006]の中の何節か[どころではなく「4印刷ページ近く」(3節)]は彼女の申し立てで禁止された。私はもはやパートラー庁(BStU)の職員が私に伝えたことさえ言うことが許されない。私はこの状況に追い込まれた」。

彼女はこの件(IMジャンヌ問題)について「私と話す機会は26年来[1980年以来]何度もあった。つまり「我々が知り合った時[1982年]、我々が結婚した時[1984年]、DDR終焉の時[1990年]、このテーマが初めておおやけになった時[2001年]だ」。「機会は信じがたいほど多くが存在した」。(グレルマンの言い分は全く異なる(8.1節)。)

＜まだ元妻との接触はあるか＞

「ない」。「私には鬱積した復讐感情を減らすことは重要ではない」。「私が望んでいるのはテーブルの上にある事柄についてこの国の中で率直に話してよいということだ」。

〔「鬱積した復讐感情」は、グレルマンに1982年以来裏切られていたことを知ったという感情か。自ら回想した予備役召集時(青木 2021:19)のように、彼は事態によっては非常に感情的になり泣き叫ぶなど、冷静さを失ったようだ。〕

＜彼女はあなたをスパイしたのか＞

「いいえ」。「だから私の当時の妻についてあとになって[2001年に]耳に入ったことが私を非常に狼狽させた」。

＜当時誰があなたをスパイしていたのか＞「私が知っている私のまわりの4人だった」〔詳しくは青木 2021:5節〕が、「今では更なる複数の暗号名が文書の中にある」ので「いつかそれらの本名を知りたい」。

〔「私のまわりの4人」のうち本名が分った2人についてミュージエは、彼らのIM判明後も、「私は究明するために彼らと

話す欲求を持たなかった」(Donnersmarck 2007:189)と、いたって寛容であった。〕

＜100万人以上の観客が「他人の人生」を見た。あなたはこの成功を期待していたか＞

「この映画と私は一体だ。その上私はこの映画での私の仕事を好んだ。…この映画がとても心に残り感動的であることは素晴らしい」。パートラーによればシュタジ文書閲覧申請が「20%増加した」。「それは驚くべきことだ」。

〔ミュージエは2005年10月のインタビューでは、この映画によって東独の現実の「本格的」な描写が生まれた。シュタジについて「技術的な細部を詳しくは知らない」が、「“今度は誇張だ”と言わざるを得なかった」。他方、脚本には「この映画の中の重要な人々」[ドライマン、クリスタ、ハウザーら]が、その「相互関係や芸術・国家・シュタジとの関係の中で非常に正確にかつ思いやり深く記述されていた」ので、「この映画が制作されることが重要だと思った」との発言した(Donnersmarck 2007:182f.)。このようにこの映画のシュタジ描写よりも芸術関係者の描写に感動していた。私も同様の感想であった。この映画のシュタジは例えば1950年代の40時間尋問が残る(青木 2021:7)など種々の「誇張」があった。〕

＜「あなたの同僚ヒュプヒェンはこの映画を政治的なくだらない作品と批判し、さらに「元妻を密告しているあなたを非難している」＞

「我々は誰もが自分の意見を公表することができる国に住んでいる」。「私にとってより重要」なことは、「レンクスフェルト(Vera Lengsfeld)やビアマン(Wolf Biermann)[彼のこの映画批評は青木 2021a:2.1.1節]、ブルシッヒ(Thomas Brussig)、ガウク(Joachim Gauck)」その他大勢がこの映画を「非常に正鵠を射ている」と評価したことだ。(紹介完。)

レンクスフェルトは婚姻時の姓ヴォレンベルガー(Wollenberger)として有名な反体制活動家であり、やはり職業禁止となった(青木 2021a:4-5)。体制転換後に夫(Knud)が妻を対象とするIMだったと判明して離婚、旧姓に戻した。ブルシッヒは作家、ガウクは東独の牧師・教会幹部、その後BStU初代長官、ドイツ大統領となった。

8.3 ミューエほかに(シュピーゲル誌 2007年3月4日)

シュピーゲル誌の記事Osang(2007)は、オスカー授賞式(2007年2月25日)へ行くドナースマークやミュージエらこの映画の関係者に同行した、いわばオスカー旅行記であるとともに、ミュージエとグレルマンの係争をもう1つのテーマとしている。記事には旅行中の多くのインタビューや旅行3週間前のベルリンでのミュージエへのインタビューなどが出てくる。

この記事はドナースマークを、「この大きな男は中心にしやしやり出るわけではないが、彼が中心である。彼は魅力的で、素早く、自信がある」し、受賞スピーチも、メディアやレセプション、催しの対応にも心得があり、「英語、フランス語、ロシア語、イタリア語を話し、スペイン語も少し話す」と激賞する。

他方「これらの能力のほとんどを習得していない」ミュージエは「側に立ってほほえんでいる」と記されている。彼は妻ロータールから授賞式の「ステージに一緒に上がる」ように叱咤されたが、上がったかどうか記されていない。

彼とミュージエが向き合った大きな、やや珍妙な写真が記事の冒頭にある。彼はミュージエの頭上を見下ろすほどの身長で、体積も3~4倍ありそうである。だからこの写真には、まるでド

イツ統一の象徴のようだと説明が付いている²⁴。

ほかにミュエのグレルマン、ロータルとの各結婚時代の写真もある。前者ではアンナも一緒、後者ではミュエがオスカーを手に入れている。

以下では主にグレルマンとの係争とその関連部分を抜き出して紹介する:

ミュエのハリウッド行きには妻ロータルはもちろんだが、最初の妻の子である長男で写真家のアンドレアス(Andreas Mühe)も同行した。彼は父が「グレルマンのために彼の母から去ったあと、ロータルのためにグレルマンから去ったあとにも常にミュエとコンタクトしていた」。

演劇大学で同級生だったヨンカ(Heike Jonca)によれば、ミュエの最初の妻は「カールマルクスシュタットの劇場の芸員であり、彼女がフォルカー・ブラウンやクリストフ・ハインなどとの友人関係を作った」。ヨンカも同劇場へ行き、「そこでミュエの才能がすぐに目立った」と言う。

ミュエは[1982年以後]東ベルリンで「民衆劇場、ドイツ劇場、そしてのちに映画でもスターになった」。彼がポスターを「10代の時に彼のベッドの上に掛けていた」グレルマンと[二度目の]結婚をし[1984-1990年]、東独では二人は「DDR映画の夢のカップルと見なされ」、「ニコライ地区」(Nikolai Viertel) [再建されたばかりのニコライ教会を中心とする東ベルリン中央区の歴史的地区]に住居を構えた。

「そこにはマルクス・ヴォルフも住んでいた」。「ヴォルフは1986年まで長年シュタジ偵察本部(HVA)長と務めたいわゆる「顔のないスパイ」で、根っからの親ソ派であり、ゴルバチョフがホーネッカーに代わる書記長にしようと画策したが失敗した。2006年死去。」

ミュエは「1980年代半ばから西への旅行も許され、また「ハイナー・ミュラーに近づこうとした」。「1989年11月4日ミュエはアレクサンダー広場での大規模なデモで演説した。その後[同月9日]壁が崩壊した」。

ところが彼自身が言うには、「当初壁の崩壊に失望し、ほとんど意気消沈し、最初の自由選挙[1990年3月]の際にこともあろうにCDU[西独首相コールが支援した東独キリスト教民主同盟]に投票した自国の人民に腹を立てた」。

オーストリア・ザルツブルクでのT.ラングホフ演出の舞台出演[1990年]の際にミュエは、「西独の女優ロータルと知り合った。…彼は彼女に夢中になり、グレルマンから、そのあとドイツ劇場からも離れた。…今ではさらに西へ行っただけでなく、彼は東を捨てた。そして彼の過去に対する彼の見方が変わり始めた」。

ミュエは[人生を]「もう一度新しく始めるつもりだった」と言う。彼はドイツ劇場では1996年まで「ゲストとして」出演したが、「そこでは空気がよどんでいた」し、その「食堂に入った時は全く不快だった」と言う。事実、同劇場での共演者も「ウリ[ミュエ]はいつも孤独に見えた」と言う。

[過去を捨てて人生をやり直すという言葉は私は当時知り合いの東独経済学者からも聞いた。これは、1980年代初めの政治局員ミッタークによる新経済学教科書不許可事件の内実を書き残すべきだという私の意見に、彼が応じなかった理由だった。しかしミュエはなお過去の解明にこだわった。特にこの映画への出演がそれを一層促した。]

彼は「ウィーン、ハンブルク、[西ベルリンの]シャルロッテンブルクに引っ越し」、グレルマンとの娘アンナが同行し、ロータルとの間に2人の子が生まれた。

「映画“他人の生活”の中で大尉ヴィースラーを演じるまでは、彼は東を引き離したと信じていた」。ところがこの映画は「彼の東の過去に直接触れた彼の初めての西の映画であり、彼はすべてが再び掘り返されたと言う」。

この映画のマイネケ夫人役として共演した、やはり東独出身の女優グルーバー(Marie Gruber)はこの映画を「コメディーと感じた」。しかし、ミュエは違った。彼は、この映画から、「私がDDRでは常に不安、恣意と干渉への不安を抱いていた」ことを想起したと言う。

ドナースマークは「全世界が理解する善と悪のメルヘンを描くつもりだったが、しかし彼は本当の東独生活によってそれを裏打ちするつもりでもあったと思われる。その両者がミュエにおいて結び付けられた」。ドナースマークによるインタビューの中でミュエが「彼のDDRへの別れや幻想、不安、夢について、またグレルマンについても話した」からである。[このインタビュー(Donnarsmarck 2007:182ff.)は青木(2021:5節)に紹介したが、グレルマンへの言及部分(下記)は2007版では削除されたので、紹介に含まれない。]

彼はインタビューの中で「元妻グレルマンにシュタジのIMというレッテルを貼った。それは彼がバートラー庁[=シュタジ文書連邦保管庁(BStU)]から得た情報であり、それは国家権力の私的な領域への侵入を描くこの映画に合致した」。

「しかしグレルマンは、重体でありながら、その無実のために闘い、[シュタジ]文書はミュエが言い立てるほど明確ではなかった」。にもかかわらずミュエは「グレルマンが死に瀕している間も彼の主張の実現のために「ドイツの裁判所と醜い闘いを続け」、「それに負けた」。

「たとえ彼の言うとおりであったとしても」、「死にかけている女性に対する闘いに勝つ人はいない」。「彼女は「死にかけている女性」ゆえ同情を得たが、だから勝ったわけではない」。

彼女の闘いの最中に、ミュエはこの映画によって優秀ドイツ俳優、彼女の死後に最優秀ヨーロッパ俳優に表彰された。

それでもミュエは、「遺憾」ながら「私は純粋な心でこの映画の途方もない大成功を楽しむことができなかった」と言う。「この映画はミュエの人生と混ざり合っていた」のであり、「彼の[三番目の]妻ロータルが言うとおりの、「ミュエがこの映画そのものである」」。

グレルマンのIM問題についてミュエは2001年の「Super Illu」の記事を読んでしたが、ドナースマークによるインタビューの「最初のうちはそれについて話すつもりがなかった」。しかしドナースマークが[インタビューとして]「4時間ミュエと話し、ミュエが自らそれに言及することを絶えず希望した」が、ミュエは「気付かなかった」。そのためインタビューの最後にドナースマークがそれを質問し、ミュエが「私の当時の妻がその間じゅうずっとIMとしてシュタジのために働いていたことを、私はあとになって知った」などと話した。

その後裁判所によって「その箇所は禁止され、本が黒塗りされ、これを二度と主張しないことをミュエは義務付けられた」。彼は[これに不服だったが]、「今年[2007年]初めの驚くべきプレス声明の中で、それ[当該発言禁止]を容認した」。

その「半年前にグレルマンは死んでいた。いったいなぜ彼

²⁴ 1989年西独の人口(6268万人)が東独(1643万人)の約3.8倍、面積は約2.3倍(約24.9万対10.8万km²)であったことを二人

が象徴するという意味である。当時日本は人口は約1.22億人、面積は約37.8万km²であった。

は静かにすることができなかつたのか?」。

ミュエは、[このことについて]次のように「3週間前[2月10日頃]にベルリンで行われた会話の中で語った」。

ミュエは旧東ベルリン地区での会見を嫌った。というのはそこは、彼を「裏切り者、歴史歪曲者と見る[元]同僚たち」や「グレルマンの死を看取り…彼女の評判を守ることを誓った彼女の友人たち」、彼女の「弁護士たち」がいる「地雷原」だったからである。

会見場所として彼はクーダム[西ベルリン地区にある中心繁華街]のホテル9階のテーブル1つと椅子2つだけの「まるで尋問」室のような部屋を指定した。

「[元]妻との闘いを始めたことを後悔したことがあるか」と聞くと、彼は「もちろん私がそうしなかったらと考えた瞬間があった。…しかし私は真実を話すことを許されなければならない。近づいてきた煙突掃除人に、君は煙突掃除人だと私が言うと、彼が君はそれをまず証明しなければならぬと言うとすれば、それはおかしい」と答えた。

[この回答になぞらえれば、グレルマンとその擁護者は「煙突掃除人」という証拠文書の誤りの証拠を提示したのだから、ミュエの比喩は見当違いである。]

「グレルマンが重体だったことが彼の感情を乱さなかつたのか」と聞かれたミュエは、「ああ、いいえ。私は当時まだ私と同居していた娘のアンナにそれを1998年に言わなければならなかつた」と答えた。[グレルマンは1999年までに発症と言われる(4節)が、(元)家族ではすでに1998年に分っていたのかもしれない。]

「ミュエの感情はゆらめいた。彼は悲しみ、激怒し、断固とし、途方に暮れ、自制し、混乱していた」、彼は「自分自身と争っているという印象を時々受けた」と筆者(Osang)は記す。[続いて彼が最初の妻やグレルマンを「見捨てる」時などの「混乱」ぶりの証言が引用される。]

彼は「元々勇敢な人間」ではなく、1989年11月4日のアレキサンダー広場でも「演説すべきかどうかを長い間熟慮していた」、結局グレルマンが助言して決断したと元同僚は言う。

では「いま誰が彼に助言しているのか」。「ミュエが言うには、彼には元々友人がいない」のだから、[三度目の]妻ロータルだと筆者は見る。ロータルが「ミュエに何を助言したか想像可能である。ミュエの最初の妻も、彼が断固とし続けることを支持したと彼女の息子アンドレアスは言う」。

「ロータルは東部[東独地域]が好きではない」。彼女が1983年にドイツ劇場の「幽霊」(Gespenster)を見るために東ベルリンへ行った時、チェックポイント・チャーリーでの同行者の扱いやレストランの様子に腹を立て、「それが私があっち[東独]に行った最初で最後だった」と言う。[当時の一部の傲慢西独人らしい反応である。]

「ミュエはこの出演によって有名になった」。[彼は息子オスヴァルド役であった(図2)。]

グレルマンとの娘アンナはミュエに、「母と闘うことを中止するように彼に頼んだと言われる」。演出家グラフ(Dominik Graf)とリンク(Caroline Link)も彼への手紙で「彼の元妻を煩わせないように」求めた。

シュタジの標的だった上記の特派員プラガルもミュエへの手紙で、「シュタジ文書の辻褄が合わないことに注意を喚起し、ミュエと会うことを申し出た」が、彼は返事しなかつた。

東独時代の元同僚ヒュブヒェン(Henry Hübchen)も、ミュエのグレルマンへの態度を「卑劣だと考え」、この映画自

体も「そのようには存在したことないDDRなるものを示している」と非難する。「数人の俳優はこの映画の出演を取り消した。ミュエが共演だったからである」。

図2「幽霊」(1983年)で息子役のミュエ(中央)



(注)ドイツ劇場はイブセン原作の「幽霊」をT.ラングホフの演出で1983年11月18日に初演した(同劇場ウェブサイトから)。(出所)File: Bundesarchiv Bild 183-1983-1118-005, Berlin, "Gespenster".jpg (CC-BY-SA 3.0), in: <https://commons.wikimedia.org/wiki/>

プラガルの妻カリン(Karin Pragal)はグレルマンを看取った一人で、病床の彼女がこの映画のDVDを見て「非常に気に入った」と言う。

「年末[=2006年末]にミュエはドナースマークに電話し、「フローリアン、私はこれ以上はできない」と言った」。

[その結果が上記の2007年初めの彼のプレス声明だろう。2006年12月にはベルリン州裁判所にDonnersmarck(2006)の出版社ズールカムブが判決受け入れを通知し、同裁判所が2007年1月18日に認諾判決を出し、同社についてはグレルマン勝訴が確定した。但しフォーカス誌の件はさらに続いた(3節)。]

このあと記事はオスカー授賞式やその後の知事主催ダンスパーティー、ドイツ公共テレビ(ARDとZDF)による撮影とインタビューでのドナースマークとミュエの様子を記す。

ドナースマークは1973年西独ケルン生まれで、14世紀に遡る貴族家系であり、父はカトリック教徒だが、母が「共産主義者」であったので、彼は「マルクス、レーニン、トロツキーと共に成長し」、少年時代はニューヨークで過ごし、その後「オックスフォードとレニングラードで学んだ」。

ドナースマークは「望むものすべて、つまりオスカーと女性首相[2005年就任の首相メルケル]の祝福を手に入れた」。首相メルケルらはこの映画を「歴史の授業で見せることについてたった今議論している」。

[ドイツ内務省傘下の連邦政治教育センター(bpb)はこの映画を「映画教育」(Filmbildung)のためのパンフシリーズ(Filmheft)に取り上げた(bpb 2006、一部内容は青木2020b:1参照)。メルケルらは生徒の映画鑑賞とこのパンフ活用の促進を「議論」したのだろう。]

授賞式後の2つのドイツ公共テレビのインタビューで[グレルマンとの]「この闘いをミュエに闘わせることを時には疑問に思ったかどうか」と聞かれたドナースマークは、「一瞬驚くほど途方に暮れ」つつ、「もちろんそうした瞬間もあった」が、「それは弱さのしるし」であり、「人は正しいと思うことのために責任を持たねばならない。私はそのように教育され、そのように私の人生を生きている」と答えた。[彼は、判決後もミュエが「正しい」と考え続けたかのようである。]

彼は、5月2日に34才になるが、「その後はもはやシュタジという言葉は口にしたくない」と言う。

翌朝ミュエは「オスカーだけは嬉しかった」と言う。その様子は、この映画の「最後のシーンにおける大尉ヴィースラーのように見える」。(この記事の紹介は以上。)

「最後のシーン」はヴィースラーがドライマンによる献辞を見る場面(青木 2020b:28)である。それはヴィースラーにとって、彼が信じた社会主義・共産主義の崩壊という絶望の中での小さな幸せにすぎなかった。しかし死期が迫った俳優ミュエにとって、グレルマンとの係争に屈したことに悔いが残るとしても、オスカー受賞映画の主演を務めたことは、ドイツとヨーロッパの男優賞ともあいまって、本望であっただろう。

9 最後に

ミュエの死の直後の追悼文 Deggerich (25.07.2007)の一部を紹介する。この記事はミュエを「彼の世代の最も偉大な」俳優の1人とし、彼の気持ちを代弁している。

彼は「なぜ」とか「なぜそうするのか」という質問を好み、答えが得られないと、「ウィーンのブルク劇場」の仕事さえやめた。この劇場なら「ほかの人々はただそこにいたためだけに、入場券もぎりぎりさえ引き受けただろうに」。

彼は[Donnersmarck 2006 所収の]インタビューでのグレルマン非難によって、「映画のための PR」とか「自己顕示欲」など「多くの非難を受けた」。しかしこの「インタビューは[全体を見れば]およそ告発的でも独りよがりでもなく、懐疑的、探求的で、物わかりのよいものであった。それはグレルマンよりもミュエのことを多く語った。それが黒塗りされてのみ読まれ得るということはミュエを骨の髄まで痛めつける」。

[黒塗りないし削除されたのはグレルマン非難の部分のみであって(とはいえ上記のように 4 印刷ページ近くもある)、「懐疑的、探求的で、物わかりのよいもの」は残されている。私の手元の版にはこの残された部分しかないが、とても興味深い真摯な回想だと感じた(青木 2021:6 節参照)。]

彼は「自分の考えや感情、言葉についての自由を取り戻し、何が起こったのかについて公然と話せること」を望み、「さもないければ私は自分史から逃げるといった気持ちを持つだろう」と彼は言った。彼はそれを DDR 感覚と呼んだ。[ほぼ同じことをグレルマンも言うだろう。]

略語

- シュタジ = Stasi、東独国家保安省(MfS)またはその職員 of 略称。
 東独時代にはシュタージ(Staasi)とも略称された
 人民警察 = Deutsche Volkspolizei (略称 DVP)、ドイツ人民警察(東独警察)
 BND = Bundesnachrichtendienst、連邦情報局(西独、現ドイツ)
 bpb = Bundeszentrale für politische Bildung、連邦政治教育センター(連邦内務省傘下の公的機関)
 BStU = Die Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR、旧 DDR シュタジ文書連邦保管庁。但しシュタジ文書は 2021 年 6 月連邦公文書館に移管。
 CDU = Christlich-Demokratische Union、キリスト教民主同盟(西独・統一ドイツの保守と言われる政党、東独にも存在)
 DDR = Deutsche Demokratische Republik、ドイツ民主共和国(東独)
 GMS = Gesellschaftlicher Mitarbeiter für Sicherheit、社会的保安協力者
 IM = Inoffizieller Mitarbeiter、非公式協力者(シュタジに協力し

た密告者で、秘密工作や暗殺に関わったこともある)

IMS = Inoffizieller Mitarbeiter zur politisch-operativen Durchdringung und Sicherung des Verantwortungsbereiches、政治的・作戦的浸透と責任分野の保安のための非公式協力者(1968 年以後の IM カテゴリーで、以前は GI ないし GHI)(詳細は補注 1)

MfS = Ministerium für Staatssicherheit、国家保安省(シュタジ本部とその出先)

OPK = Operative Personenkontrolle、作戦的人物コントロール(監視、盗聴、郵便検閲など)

OV = Operativer Vorgang、作戦事案(明白な容疑の処理作戦)

OV 規定 = シュタジの「作戦事案の発展と処理についての方針 1/76」(AGM 198)。1976 年 1 月 1 日発効

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党(ドイツ共産党(KPD)が戦後ソ連占領下でドイツ社会民主党(SPD)を吸収して誕生し東独支配党になった。体制転換後 PDS(Partei des Demokratischen Sozialismus、民主社会主義党)を経て現在左翼党(Die Linke))

TSP = Der Tagesspiegel、(西)ベルリン発行の日刊紙

ZAIG = Zentrale Auswertungs- und Informationsgruppe、中央評価・情報グループ(シュタジ本部で情報収集分析評価を担う)

引用文献

- (注)本文中記載の URL を除く。URL は特記しない限り本稿発表時有効。BStU 入手資料は現在ドイツ連邦公文書館に移管されたが、分類番号は同じ。
- 青木國彦(2020)東独文化政策の規制と緩和(1963-1976 年): 東独ホーネッカー政権初期の自由化について(2)、『社会主義体制史研究』12, in: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>
- (2020a) アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀: 東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3), in: 同上 URL
- (2020b) 脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題「他人の生活」)(1): 宣伝と実際、『社会主義体制史研究』14, in: 同上 URL
- (2021) 脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題「他人の生活」)(2): 批評の批評、『社会主義体制史研究』21??, in: 同上 URL
- (2021a) 東独における職業禁止と自由業、『社会主義体制史研究』19, in: 同上 URL
- (2021b) 東独秘密警察(シュタジ)の作戦規定と組織: ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して、『社会主義体制史研究』21, in: 同上 URL
- AGM 198: Richtlinie 1/76 zur Entwicklung und Bearbeitung Operativer Vorgänge (OV) (01.01.1976), BStU.
- bpb (Hg.) (2006) *Filmheft: Das Leben der Anderen*, in: <https://www.bpb.de/system/files/pdf/NSUEAK.pdf>
- Brandenburg, G. (05.06.2006) Warum streitet Kino-Star Ulrich Mühe mit seiner krebserkrankten Ex-Frau vor Gericht?, in: Bild: <https://www.bild.de/leute/2006/ulrich-muehe-exfrau-streit-gericht-487778.bild.html>
- Buß, Christian (18.06.2008) Jenny-Gröllmann-Doku: Die Romy aus der Zone, in: Spiegel Online: <https://www.spiegel.de/kultur/kino/jenny-groellmann-doku-die-romy-aus-der-zone-a-560324.html>
- Deggerich, Markus (13.04.2006) Gericht stoppt Suhrkamp-Buch, in: *Spiegel-Online*, <https://www.spiegel.de/kultur/literatur/das-leben-der-anderen-gericht-stoppt-suhrkamp-buch-a-411194.html>
- ; Peter Wensierski (2006) Das Drehbuch der anderen, in: *Der Spiegel*, Nr.18 (29.04.2006).
- (25.07.2007) Ulrich Mühe: Im Getriebe der Welt, in: *Spiegel-Online*, <https://www.spiegel.de/kultur/kino/ulrich-muehe-im-getriebe-der-welt-a-496529.html>

- Donnersmarck, Florian Henckel von (2006) *Das Leben der anderen: Filmbuch*, Suhrkamp [一部が裁判所により発禁となり(詳細は本文参照)、2007年版に改訂]
- (2007) *Das Leben der anderen: Filmbuch*, Suhrkamp.
- Engelmann, Roger, u.a. (2016) *Das MS-Lexikon: Begriffe, Personen und Strukturen der Staatssicherheit der DDR*, 3., aktualisierte Auflage, Ch. Links.
- Gieseke, Jens (2006) *Der Mielke-Konzern: Die Geschichte der Stasi 1945-1990, Erweiterte und aktualisierte Neuauflage*, DVA.
- Gill, David u. U. Schröter (1991) *Das Ministerium für Staatssicherheit: Anatomie des Mielke-Imperiums*, Rowohlt
- Hielscher, Hans (27.08.2018) Geschichte eines Songs "Die Moorsoldaten", in: Spiegel Online
<https://www.spiegel.de/geschichte/die-moorsoldaten-vom-kz-lied-zum-welthit-a-1224223.html>
- Kascha, Hartmut (19.08.2006) Abschied von Jenny Gröllmann: Streit um Stasi-Vergangenheit ging am Grab weiter, in: Bild <https://www.bild.de/leute/2006/jenny-groellmann-beerdigung-739836.bild.html>
- Krug, Manfred (1996) *Abgehauen: Ein Mitschnitt und Ein Tagebuch*, Econ. 手元にあるのは Ullstein による 2004 再版
- Labrenz-Weiß, Hanna (1998) *Die Hauptabteilung II: Spionageabwehr* (MfS-Handbuch), BStU.
- Labrenz-Weiß (1998) *Die Hauptabteilung II: Spionageabwehr* (Handbuch), BStU.
- Leinkauf, Thomas (21.06.2006) Die Anwälte von Jenny Gröllmann und Ulrich Muehe trafen sich vor Gericht: Die Akten und die Wahrheit, In: Berliner-Zeitung
<https://www.berliner-zeitung.de/die-anwaelte-von-jenny-groellmann-und-ulrich-muehe-trafen-sich-vor-gericht-die-akten-und-die-wahrheit-li.6325>
- Müller, Uwe (14.01.2008) STASI: Die verlorene Ehre des Ulrich Muehe, in: *Die Welt*
<https://www.welt.de/kultur/article1552547/Die-verlorene-Ehre-des-Ulrich-Muehe.html>
- (08.02.2008) Gröllmann soll als IM "Jeanne" gespitzt haben, in: *Die Welt*
<https://www.welt.de/politik/article1649184/Groellmann-soll-als-IM-Jeanne-gespitzt-haben.html>
- Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010), *Wer war wer in der DDR*, Ch. Links.
- Osang, Alexander (2007) Oscars: Das Leben neben dem anderen, in: *Der Spiegel*, H.10.
- Pergande, Frank (29.04.2006) Jenny Gröllmann und Ulrich Muehe: Sie waren einmal ein Traumpaar, Frankfurter Allgemeine Zeitung, in:
<https://www.faz.net/aktuell/feuilleton/kino/jenny-groellmann-und-ulrich-muehe-sie-waren-einmal-ein-traumpaar-1327975.html>
- Plenzdorf, Ulrich; K. Schlesinger; M. Stade (1995) *Berliner Geschichten, »Operativer Schwerpunkt Selbst-verlag«: Eine Autoren-Anthologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde*, Suhrkamp.
- Pragal, Peter (2008) *Der geduldete Klassenfeind: Als West-*
Korrespondent in der DDR, Osburg.
- Schreiber, Jürgen (29.04.2006) Der Verführungsoffizier, in: *Der Tagesspiegel*
<https://m.tagesspiegel.de/der-verfuehrungsoffizier/706018.html>
- (2009) *Die Stasi lebt: Berichte aus einem unterwanderten Land*, Knauer Taschenbuch. [これは Schreiber (29.04.2006) を再録し、副題のみ追加。]
- Spiegel (04.07.2006 Online) Mühe-Prozess: Gröllmann darf nicht IM genannt werden, in:
<https://www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/muehe-prozess-groellmann-darf-nicht-im-genannt-werden-a-425012.html>
- Stern (30.07.2006) Jenny Grollmann: "Ich muss das zu Ende bringen - meinetwegen bis zum Tod", in:
<https://www.stern.de/kultur/film/jenny-groellmann-ich-muss-das-zu-ende-bringen---meinetwegen-bis-zum-tod--3595298.html>
- Stöhr, Mark (3.06.2008) Doku über Jenny Gröllmann: Sie leuchtete bis zum Schluss, in: Stern
<https://www.stern.de/kultur/film/doku-ueber-jenny-groellmann-sie-leuchtete-bis-zum-schluss-3857244.html>
- Suckut, Siegfried (Hg.) (1996) *Das Wörterbuch der Staatssicherheit: Definitionen zur »politisch-operativen Arbeit«*, 2., durchgesehene Auflage (Analysen und Dokumente Bd. 5), Ch. Links
- Sylvester, Regine (03.05.2006) Geschiedene Leute: Die Schauspielerin Jenny Gröllmann wehrt sich gegen Stasi-Vorwürfe, die ihr früherer Mann Ulrich Muehe gegen sie erhebt: Die Zielperson, in: Berliner-Zeitung
<https://www.berliner-zeitung.de/geschiedene-leute-die-schauspielerin-jenny-groellmann-wehrt-sich-gegen-stasi-vorwuerfe-die-ihr-frueherer-mann-ulrich-muehe-gegen-sie-erhebt-die-zielperson-li.6326>
- TSP (18.04.2008) Urteil: Jenny Gröllmann darf nicht Stasi-IM genannt werden, in: Tagesspiegel
<https://www.tagesspiegel.de/kultur/urteil-jenny-groellmann-darf-nicht-stasi-im-genannt-werden/1215280.html>
- Voigt, Tobias (2008) Rufmord: Anmerkung zu einer mißbräutlichen Werbekampagne, *Zeitschrift des Forschungsverbundes SED-Staat* (Freie Universität Berlin), Nr.23.
- Waelisch, Nathalie (ddp) (18.04.2008) Jenny-Gröllmann-Urteil: Gericht erklärt Stasi-Vorwurf für unzulässig, in: Spiegel Online:
<https://www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/jenny-groellmann-urteil-gericht-erklaert-stasi-vorwurf-fuer-unzulaessig-a-548286.html>
- Walther, Joachim (1996) *Sicherungsbereich Literatur: Schriftsteller und Staatssicherheit in der Deutschen Demokratischen Republik*, Ch. Links.
- Welt (18.04.2008) Gerichtsurteil: Gröllmann darf nicht Stasi-IM genannt werden, in: Die Welt
<https://www.welt.de/regionales/berlin/article1915065/Groellmann-darf-nicht-Stasi-IM-genannt-werden.html>
- ZAIG 26648, Richtlinie 1/79 für die Arbeit mit Inoffiziellen Mitarbeitern und Gesellschaftlichen Mitarbeitern für Sicherheit, in: BStU.